

# Just Another Life

For adult only

mechi

# Contents

scratch	3
Hummingbird	38
アクアブルー	65

このたびは、当同人誌を  
お手にとっていただき、誠にありがとうございました。  
お手に取って読みたいと思っていただき、ありがとうございます。

この本は、2022年に発行した同人誌を受注頒布用に整えたものです。  
お楽しみいただけましたら幸いです。

**scratch**

---

双子の弟のハリーの訃報が入ったのは、グレイの空に

晴れ間がぱつぱつと増え始めた3月の頭のことだつた。

僕らの他に、兄弟姉妹はいない。突然のことと両親は悲しみに暮れ、僕は葬儀などの対応に追われざるを得なかつた。

葬儀の数日前、ハリーは、ロンドンからここ、カーディフの生家に帰つた。棺の中には、確かに僕の弟が眠つていた。モーターウェイでハンドルを切りそこねてク

ラッショウしたという。遺体特有の顔の蒼さより、左の額から側頭部にかけて、傷を覆い隠す包帯の白さばかりが目についた。明るいブロンドに染められた髪を眺めながら、おしゃれや身だしなみに余念がないヤツだつたからな、とぼんやり思い返した。

僕と同じ顔の遺体を前にして、僕は、ハリーが死んだ事実を飲み込めずについた。

性格や趣味嗜好は少しずつ違つた。

勉学は同等だつたが、僕より少しだけ運動ができ、少しだけ外向的で、意欲的な野心家だつたハリーは、小さい頃から人気者だつた。

僕だつて、決して出来が悪いわけじゃない。それでも、彼より少しだけ内向的で控えめな僕は、そのつもりはなくとも、いつでも彼の引き立て役だつた。だからといって、弟をひがんだり、疎ましく思つたことはない。

僕らは、ごく当たり前に、顔貌は同じでも他人であり、その違いを尊重することを知つていて、彼は彼、僕は僕という単純なルールを忘れなければ、誰よりも仲良く、互いを理解できる友人でもあつた。

\* \* \*

ハリーの葬儀の当日。

一卵性の双子の僕らは、顔や体型こそ瓜二つだつたが、

僕らの祖父や曾祖父も埋葬されている教会には、たく

さうの人が集つた。半分は僕らをよく知るこの町の面々で、残りの見知らぬ顔ぶれは、ロンドンからわざわざ駆けつけてくれたに違いない。

どこにいても、ハリーは人好きのする、チャーミングなヤツだつたんだろう。今となつては、すつかりondonの人だつたから、あつちで葬儀をするべきだつたんじやないか…。

聖書の引用を読み上げる神父を眺めながら、僕は、僕がよく知り得ない弟に想いを馳せていた。

高校まで共に過ごした僕らは、その先で大きく進路を分けた。僕は地元の大学に通い、ハリーは大学進学と共にロンドンに出て、そのまま戻らなかつた。

彼は当時、ベンチャー企業だつた大手通信会社の起業に携わり、今ではCMOなんて役職を任せていた。  
(だから、彼の訃報はちょっとしたニュースになつた。)

ハリーのSNSや、ごくたまに寄越される連絡で知り得る限り、彼は成功したビジネスマンで、精力的に働く

き、遊ぶ、順風満帆の人生を歩んでいた。年に数度、帰省してもいつも忙しくしていたし、クリスマス休みですらロンドンで過ごすことも珍しくなかつた。(それでもマメにクリスマスカードやプレゼントを贈つてくるのは彼らしかつた。)

だから、双子であり、最も理解しあえる友人といえ、社会に出てからのハリーの個人的なことは、実際、よく知らなかつた。

僕は僕、彼は彼。必要なことは共有して、余計な詮索をしてこなかつたから仕方ない。

けれど、気づけば遠く離れていた弟との別れがこんなにも突然訪れるなんて、やっぱりうまく理解できない。叔父に肩を叩かれて、我に返つた。気づけば幾人かのスピーチが終わり、次は僕の番だつた。立ち上がり、棺を横目に前に進み出る。

花々に埋め尽くされた弟の顔は、苦しくも安らかにも見えず、直視する気になれなかつた。

振り返り、参列者を見渡すと、僕を知らない人達が少しがわついた。僕らは本当に似ているから、驚かれて仕方ない。

ざわめきが収まるのを待って、口を開いた。

「ご覧の通り、ハリーは僕の愛する双子の弟で――」

とまで言いかけて、後方の見知らぬ青年に気づいた僕は、言葉を失った。

その人は、僕を驚愕の顔で見つめていた。

瞬間、息も止まるほどの、甘い衝撃。

彼を“知らないはずが、知っている”。懐かしいような、切ない憧れ。

ビリビリと胸を締め付ける疼きに、僕は、用意してい

たスピーチの内容が全部飛んだ。

ハリーと僕の思い出を幾つか語つたが、何をどう喋つたのかよく覚えていない。

式次第が終わり、参列者がそれぞれ弟に最後の別れをするために列を作った。

最後尾にいたあの人は、親族を除く誰よりも憔悴し、悲しみに打ちひしがれていた。そして棺を覗き、ハリーの頬を撫でて何かを呟いた横顔は、誰よりも慈愛に満ちて、優しかった。それは、血を分けた僕よりよっぽどハリーの近くで寄り添い、そして想像もできないほど親密な時間を過ごした者にしかできない顔だった。

じられない、そんな顔で僕を見つめ続けていた。

僕も、信じられない。まさか、この場に全くふさわしくない“一目惚れ”に、我を忘れそなほど動搖しているなんて。

「ハリーの最高の姿を忘れないでください」とスピーチを締めくくると、それまで微動だにしなかつたあの人は、小さく開いていた唇をぎゅっと結んだ。

彼からなんとか視線を引き剥がした僕は、棺を覗かずに席に戻った。

嗚呼、彼は、弟の恋人に違いない。

全てを察した僕は、辛く残酷な現実から目をそむけた。

\* \* \*

ハリーが茶毬だいに付された後、参列者達は思い思いに繁華街のパブに向かつた。

僕は両親の住む生家に戻り、片付けや葬儀屋の対応などに追われた。

一段落した宵の口、スマホには古い馴染みから「いつものパブにいるから来い」とメッセージが入っていた。親族を代表して一言でも挨拶をするのが筋だが、両親は変わらず塞ぎ込んでいて、結局僕が対応するしかなかつた。

弟が死んだというのに、受け止めるために一息つく暇

もない。このまま、義務と日常に流されているうちに、過去のこととして過ぎ去つていってしまうのだろうか。

コートを羽織つて外に出ると、陰鬱な小雨が冷たく頬を濡らした。

いつものパブに着くと、すっかり日が暮れていた。

町で一番大きなこのパブは、このような機会にもよく使われる。店主は僕を見るとお悔やみを述べ、黙つていつものエールをパインントてくれた。

客の8割は葬儀の参列者達で、ほとんどがこの町の者だった。今日も明日も平日で、ロンドンから来た人達の多くが既に帰路についたのだろう。ざつと見渡してもある人の姿はなく、ほつとした気持ちの裏で、ぽつりと滲む寂しさをアルコールで飲み干した。

端のテーブルから順に挨拶と雑談をし、見知らぬ顔がいればハリーとの関係を聞き、今日までの感謝を伝えて周つた。

挨拶をし終えると、どつと疲労を覚えた。どこかのテーブルに加わる気になれず、カウンターに掛けると、店主が「これはおごりだ」とエールのおかわりをくれた。

「ありがと、嬉しい」

グラスに手を伸ばした時、背後から「隣、いいですか」と声をかけられた。聞き覚えのない声を、作り笑いであしらう気力はなかつた。

少し、そつとしておいてほしい。そう言うつもりで振り返ると、あの人気がいた。

「…っ！」

驚きのあまり、声が出なかつた。ドキドキと震える心臓を落ち着けたくて、冷えたグラスを掴む。葬儀のように強く捕われた視線を外せずにいると、見上げた彼は微かに笑い、僕の返事を待たずに側のスツールに掛けた。

「デイヴィッドといいます」

静かに名乗つた彼は、店主にギネスとチップスをオーダーした。

彼は長いこと外にいたのか、濡れて束になつた髪が力なく額に落ちていた。印象的な目元は、髪色と同じ、ブラウンの瞳がきれいだ。斜めつた細い鼻筋や、黙つ

てたら不満気な下唇すら、可愛げに見える不思議な魅力がある。悲痛に塗りつぶされていなければ、きっと、見惚れるほど愛らしいに違いない…。

なんて、まるで品定めでもするように見入つっていた自分を、恥ずかしいと思う。

「…僕は、マイケル——」

「ハリーのお兄さん、ですね」

大きな瞳が寂しく陰るのが見えて、僕は不躾に見つめ過ぎていた視線をカウンターに戻した。

「そう、今日…来てくれてた、よね——」

「僕は、ハリーと付き合つてました」

「そつ、か…」

デイヴィッドの告白に、安堵していた。個人的なことに触れるのはまだ早いと思つたし、何より、彼への好意を自覚した今、ふたりのことを自ら誘索する気になれなかつた。

そして、何を話すべきかわからかねて黙り込んだ僕に、彼は不安を覚えたようだつた。

「…ハリーは、僕のことは…？」

「…ああ、『最高の恋人がいて、人生バラ色だ』って、

たびたび自慢してたよ」

「そうですか…」

ほつとしたのか、疲れた横顔が緩んでいく様に、僕は、思わず見入ってしまう。

「頻繁に連絡を取り合ってたわけじゃないし、お互い必要なことしか言わないから、詳しくは知らなかつたけど…」

「…」

「これでも僕らは仲がよかつたんだよ、ただ――」

「付かず離れず、いい距離だつたんですね」

ギネスを舐めた唇の口角が上がつて、また、目を奪われる。

「…そう、思う」

「ハリーは『双子の兄がいる、僕と違つて堅実で、真

面目で、信頼のおけるヤツだ』って、言つてました

「そつ、か…」

彼の言葉に、浮つく胸が痛んだ。信頼のおけるヤツは、弟の恋人に横恋慕なんかしないだろう。

黙り込んだ僕に、デイヴィッドはさり気なくチップスの皿を押して勧めた。

食欲はなかつたが、一つ頬張ると、彼が塩とビネガーを振ったそれはとても美味かつた。

「だから今日は、とても驚きました」

「？」

「あなたが、本当にハリーにそつくりだから…」

目を細めて、懐かしむよう僕を見つめる彼に息が詰まる。柔らかなその笑顔は、弟に向けられたものだとわかっていても、高鳴る胸を抑えることはできない。顔が赤くなつた気がして、僕は慌ててエールを煽つた。酔いのせいだと誤魔化せていたらしいと思いながら、話題を変えた。

「…それで君は、外で、何か用事でも？」

盗み見た彼は「ああ」と苦笑して、濡れた前髪をラフに掻き上げた。オールバックになつた彼は突然男らし

さが増し、度肝を抜かれるほど凜々しい。

どうやら、デイヴィッドは僕の“タイプ”らしい。

認めざるを得ない甘く苦い感情を、喉で弾けるアル

コールが増幅する。

「いえ、ワイワイ飲む気にならなくて、あなたもいな

かつたし…ハリーの育った町を見てみたくなつて——」

「雨なのに——」

「明日は、昼前には帰るから…」

「…」

「戻ってきたら、あなたがいたから…よかつた」

「つ…」

沈痛な面持ちが一転、屈託のない笑顔になつて、僕はもう、彼から目を離せなくなる。

「…場所、変えませんか？」

「え？」

「もう少し、静かに話せるところがいい」

気づけば、店内は随分賑やかになつていた。振り返る

と、酒が進んだあちこちで笑いや歎声が上がるそこは、もはや故人を偲ぶことなどとうに忘れ去つていた。

「…そうだね、それがいい」

断る理由もなく、デイヴィッドに着いてパブを出た。

\* \* \*

雨はやみ、夜のネオンは薄靄に霞んでいた。

デイヴィッドは、駅前のマリオットに宿を取つていた。

パブからのんびり歩いても10分弱。「ラウンジにバーがあつたから」と誘われるまま従つたが、肩を並べるのは気が引けて、少しだけ距離を取つて歩いた。

道すがら、デイヴィッドは、思い出したように軽く自己紹介をした。僕とハリーの2つ年下で、証券会社に勤めていると言う。

ロンドンでのふたりは、誰もが羨む華やかなカップルだつたかもしれない。彼らの姿を想像すれば胸がチクリとして、それ以上考えるのをやめた。

そして僕は、地元の国立博物館で学芸員をやつていることを話すと、彼は目を細めた。

「想像もつかなかつたな」

彼が、ハリーから想像していた僕は、どんな感じだつたのだろう。

「僕は、多少、保守的なんだ——」

「何も悪いことじやない、僕の顧客にだつていっぱいいるよ」

少しづつ碎け始めた彼の言葉尻は、恐らく酔いのせいではなく、それを僕は、嬉しいと思う。

「あなたは、確かに、ハリーと全然違うみたいだ」

「昔から、よく言われてた」

「面白いと思う」

デイヴィッドはニコリと笑い、僕の背を押してホテルのエントランスへ促した。

「あなたは、アルコールに逃げたりしないんだね」  
彼は「僕は飲むよ」と眉を上げ、ぐいとグラスを飲み干した。

「僕だつて飲めるけど、ハリーみたいな飲み方はしないよ——」

「バカスカ飲む人だつた」  
ぱくりとオリーブを頬張り、恋人を懐かしむ彼の目は遠くを眺めている。

り人はいなかつた。

隅のソファー席に収まると、デイヴィッドは「少しでも何か腹に入れたほうがいい」とサンドイッチをオーダーした。「食欲はないだろうけど」とチーズと生ハムの盛り合わせを追加で頼んだ彼は、自分こそ辛いはずなのに、気遣いのできる人だと思う。

彼はスコッチをロックで、僕はジントニックで。فردを待ちながら思い思に酒を飲んでいると、デイヴィッドは僕の飲むペースが遅いことに驚いたようだつた。

僕の意を察してか、それとも感傷に浸りたくないのか、夜も更け始めた頃合い、マリオットのラウンジにあま

ハリーとの具体的な話を明かさないデイヴィッドを、

ありがたく思う。

そして自然と話題は、僕と弟の思い出と、互いの個人的なことが中心になつた。

「僕とハリーは趣味嗜好も似てたけど、いつもその先が大きく違つてた」

彼は「先？」と小首を傾げ、少しだけ身を乗り出した。

その興味は、弟へのものだ。深い期待を、ジンのおかわりで飲み干した。

「…例えば、僕らはカーディフ城に連れて行つてもらうのが大好きだつたけど、ハリーはそこで史劇を演じる役者達に憧れて、僕は歴史そのものに興味があつた」

小さく微笑みを浮かべた彼を、つい目で追つてしまふ。

何を望むわけでもない、デイヴィッドが近くでくつろいでいるだけの、ささやかな幸せに酔えるだけでいい

と思う。

「快活で、楽しいハリーは、人気者だつた」

「…わかるよ」と目を細めた彼は、一つ息をついて「聞

いていいかな？」と遠慮がちに口を開いた。

「何？」

「マイケル：あなたは、その、誰か：いるの？」

ちらと僕を伺つたデイヴィッドは、初めて彼から先に視線をそらした。

そして僕は、初めて名前を呼ばれたことに、自分でも驚くほど動搖していた。

「誰かつて――」

「恋人」

「…いるよ、彼女」

「そつか、よかつた」

彼はほつとしたように笑い、グラスの残りを飲み干した。

「？」

「…こういう時は、支えになる人が必要、でしょ：？」

デイヴィッドの柔らかな眼差しに、胸が苦しくなる。

そういう人を失つた彼にどう答えばいいのかわからず、僕は、苦し紛れに話を変えた。

「…デイヴィッド、君は…泣かないんだね」

「まさか、昨日までさんざん泣き崩れてた…」

「…」

「けど、今日は知らない人もいるから、余所行きの鎧

を被つてるだけ」

くしゃ、と無理に笑った顔は、とても、とても痛々しかつた。

「…そう言うあなたこそ、泣かないんだね」

酔いのせいか、彼にわかつてほしかつたのか。

考える前に口をついていたのは、これまで、誰にも言わずにいた僕のことだつた。

「…正直言うと…今でも、弟が死んだつて実感がないんだ」

「…」

「だからかな、彼女に会いたいとも思わない…」

「…」

「…なんにも現実味がない、全部嘘で、騙されてるんじゃないかつて、思う」

「…」

「…少しだけ、頼みを聞いてほしい」

おもむろに腰を上げた彼は、「来て」と目で僕を呼んだ。

「……」

彼は、僕の言葉を静かに、そして真剣に見つめていた。

「…こんな、こと――」

「マイケル…」

「…」

「…あなたといると、僕もそう…思えるよ」

その微笑みは、昼間、彼が最後に弟に捧げた優しいそ

れに、とてもよく似ていた。

ただそれだけで救われた気がして、僕は、僅かにも笑了えた。

「笑った顔も、そつくりだ」

「…笑うとか、忘れてた」

苦笑いを返すと、ふいに、デイヴィッドは改まって僕を見つめた。

「マイケル」

「うん」

scratch

腕時計を見ると22時を過ぎ、既にラウンジには僕らしかおらず、スタッフがクローズ準備を始めていた。

残念ながら、お開きだ。ほんの少しでも、彼と話せてよかつた。

寂しさと甘酸っぱい気持ちを胸にしまいながら、彼の背を追う。

デイヴィッドは会計カウンターに「部屋付けで」と頼むと、ホールを突つ切つてエレベーターに向かつた。

\* \* \*

デイヴィッドの言う「頼み」は、弟の遺品を渡されるとか、そういうものだと思っていた。

彼の部屋まで着いて行き、彼がドアを開けたところで、僕は大事なことを思い出した。

「あの、デイヴィッド…」

「？」

「ごめん、すっかり忘れてた」

振り返った彼に、精一杯の笑顔を作った。

デイヴィッドは僕より3インチほど背が高い。こんな距離で、幾度となく見上げたはずの弟の気持ちを味わいながら、苦い恋を忘れるつもりで言つた。

「今日は、葬儀に来てくれて、本当にありがとう」

「…そんなの」

寂しい微笑みから、目を離せない。僕に伸びた長い腕に抱き込まれるのを、夢心地で見ていた。やむなく触れ合う頬の温もりに、息が詰まる。終わらないハグを数える鼓動は早く、別れを惜しんで彼の背をタップした。

「…デイヴィッド？」

顔を上げると、彼は待ち構えていたように僕の唇を唇で奪つた。

いけない。そう開けた唇に、彼の舌が滑り込む。でいいつど。呼んだつもりの舌を吸われて、「あ」、

声になつたのはぬるい溜息だった。

その時、どこかでガタンとドアが開く音がして、焦つて彼の胸を突き放した。後ずさる間もなく強い力が腕を掴み、ドアの奥に引きずり込まれる。流れるように抱き締められ、封じられる唇と拒否。壁に押さえ付けられて、先程より乱暴に舌を注がれる。もうやめろ。彼の肩を押し返した手も、壁に押し付けられて為す術もない。ふいに唇を離した彼は、額に額を押し付けて僕の動きを封じた。

「ど、して、こんな、いやだ……」

息を殺した口元を、乱れた吐息が炙っていた。顔が近すぎて、その目が見えない。それでも、確実に僕を抑え込む意思で、彼がシラフだとわかる。酔っていた、は言い訳にならない。

「…こんな、ふきんしんな——」

「何も、考えないで」

低く、甘い誘惑が唇に潜り込む。

僕を解いた腕に強く腰を抱かれ、左頬を長い指になだめられる。

本当に、ハリーが死んでから、ずっとずっと現実味がない。葬儀では馬鹿げた一目惚れをして、その夜には弟の恋人と抱き合っている。まるで、シナリオが用意されているかのように、彼に囚われていく。

僕は、彼の首に腕を回して、僕を貪る舌を啜った。

長い間、しがみつくように唇を奪い合っていた。彼を受け入れて今更に気づく、強い酒のフレーバーと、スペイシーウッディの甘く冷たい香り。弟が愛した男が染みつく背徳感に頸を引くと、彼はより深い口づけを僕に求めた。

「…男とは初めて？」

額いで、見上げた唇は僕らの唾液で汚れている。僕を知り尽くしたような舌に、思考を吸い取られていく

く。頬を取られ、注がれた唾液を飲み込むと、彼の唇

が深く笑つた。

口づけに溺れているうちに、ジャケットとシャツを脱がされていた。ひんやりとした外気を感じて、この先に待ち受けているものを、ふいに恐ろしいと思う。

「だめだ、いけない——」

「どうして……」

「こわい——」

「怖くない」

我に返った僕の額からまぶたに、慣れた男の口づけが落ちる。

「よごれてる——」

「構わない」

「いや、だつ……」

唇間、弟に触れた指が、僕の左胸を探る。

熱を帯びた肌と、胸に秘めた昂奮は、隠すことができない。

「わかつた」

再び僕らは口づけを重ね合い、互いの服を剥ぎながらバスルームに辿り着く。

シャワーの下で、裸で抱き締め合っている。

重ねた肌で知る体はお湯より熱く、腹にめり込む彼の男根は更に熱く、硬い。

「…マイケル」

「…つ

耳を喰み、名前を囁かれるだけでカラダが火照る。焦れる昂奮を彼になすると、彼は唇を僕の胸に落とした。羽が舞うほどの軽さで、乳首の先を舌と指が弾く。

「つ

僕を見上げる舌が笑い、うねつて、声を殺す僕を煽る。

「う……」

揉みしだかれて、つまみ出されたそこを、力を込めた

愛撫が捏ねる。

「ん~アツ……」

こんなにきもちいいのか。未知の快感を知ったカラダ  
は、淫らな欲求に従順になる。

彼の頭を抱いてペニスを胸に擦りつけられ、彼は心得  
たようにキスで下腹へ辿り、躊躇なく僕をその唇に吸  
い込んだ。

「あ、あ…」

器用な舌が優しく僕を舐り、長い指が荒っぽくサオを  
しごいている。

女性とのそれとは別モノの快感は、男同士だからか、  
それとも彼だからか。

強く吸われて先走りがこぼれ出すと、彼はねじるよう  
に僕を絞り、絡める舌で衝動を誘つた。  
「…ア、はッ…！」

熱いものを放つ快樂に膝が抜け、たまらず壁に背を預  
けた。一度、二度、強く吸われて、彼が精液を飲んだ  
のがわかる。

「…は、あ…」

残滓を丁寧に啜つた彼は、僕を見上げてうつとり笑つ  
た。そして僕から口を外すと、見せつけるように亀頭  
を舌の上で転がした。

崩れていく思考の端で、悪魔のような男だ、と思つた。

舌と指を這わせ、ゆっくり僕の体を這い登る彼に、戻  
れない所へ引きずり降ろされていく。

そして彼は僕の背に回ると、背後から伸ばした手でく  
たびれた僕を握り込んだ。

「ア…」

「自分で腰振つて」

耳元の誘惑は、低く甘い。僕を待つ男根が尻の窪みで  
上下して、腰から背にぞくりと高揚が走る。彼に合わ  
せて腰を揺らすと、彼は興奮の滲む吐息を僕の耳に吐  
いた。

無心で、彼の手の中でペニスを滑らせていた。骨ばつ  
た節に擦れて、萎えた海綿に血が戻る。カリ首をくす  
ぐり、裏筋をなぞる指先に翻弄される。早まる腰を伺

いながら、彼は腰を振る僕の逆にサオをしごく。

「あ、ア、きもち、いッ…」

天を仰いだ唇を、強引に唇で塞がれる。乱暴にねじ込まれる舌で、僕の精液の味を知る。伸ばした舌を絡め取られ、息ができない。

「…ン…ぐッ…うつ…！」

強い恍惚に、ぶれた視界が白く塗りつぶされる。

ぐぶ、と異物がアヌスを割る痛みに我に返った。

「え…」

腕ごと抱え込まれて、身動きができなかつた。

やみくもによるじる腰の隙に、彼は容赦なく腰を突き上げる。

熱く、硬いオスに尻を拓かれる痛みに、彼の腕に爪を立てる」としかできない。

「あ！やめっ、あ…あつ…だつ…アアッ」

「おおッ…」

声をあげると尻が締まり、体内の男根を否応なく締め

上げた。ほんの僅かな滑りだけで、一方的な情欲を受け入れてしまうカラダが悔しい。

「ん、ぐ…つ、う…」

奥へ、そしてまたその奥へ。僕を侵す鈍い痛みが、窮屈な違和感から痺れる熱にスライドしていく。

もう何度目か、亀頭にえぐられた腰の底に、のけぞるほどのが快感が滲んだ。

「…んッ…お、おッ…！」

「…ああ…」

背後の彼が、ひつそり笑う。

「ここだろう、知っている、と腰を回して貫かれれば、

僕のペニスは跳ね上がり、切れ切れの先走りが飛び散つた。

「ああっ、ああっ、ああっ、そこつ…おッ」

僕を打つ腰が早まり、ぶつかる尻がびたびたと音を立てて。抓られる乳首の痛みすら、腹の底に熱を灯す。

嵐のような快感に落ちてしまふ腰は、否が応でも彼を深く咥え込む。僕の中を、浅く、深く、真奥まで。交

わるほどに強まる快感と、大きく、強いストロークで上上下下するペニスのカタチしか見えない。

もう、おかしくなる。

彼の腕の中で、激しい絶頂に崩れ落ちる。

「きもちよかつた？」

囁く彼に、頷きを返すこともできない。

彼は僕の頭を抱いて、僕の涙を啜り取つた。

な匂い。そして体が僅かに離れると、僕らの下腹部から性的な臭いがした。

「欲しいって言って」

「ほ、ほしい…」

「僕の名前を呼んで」

「で、いぢいつど…」

「…何？」

「…きみが、ほしい…」

一度彼を受け入れたカラダは、二度目となればあつさり彼を飲み込んだ。

バスルームでのことが嘘みたいに、彼はただ、僕に覆いかぶさつて、腰を前後し続けている。静かな、だけど激しい、めくるめく快感に埋め込まれていく。

「愛してるって言つて」

「ア、あいし、てる…あ、アアツ…」

戯れにはふさわしくない言葉を求める彼は、悲しいほど

真剣に、切実に、僕の目を覗いていた。僕の体の隅々を這う指は、愛撫の痕を残しながら、僕ではない者を

殺風景なセミダブルの小部屋。

2人の大人の男が体を投げ出すには不十分なサイズのベッドで、デイヴィッドと僕は、抱き合つていた。

まるで恋人同士のように口づけを重ねて、その唇を首や胸に滑らせて、吸つた肌に歯を立てて、明日の迷惑

も顧みない愛撫を繰り返している。

香水の消えた肌は、乾いた男の体臭がする。ツンと鼻につくオスと、少しだけ甘く、柔らかく懐かしいよう

探していた。確かめるように、すがるように打つ腰は、

ていた。

「ごめん」

彼を遺して逝った者への怒りをぶつけているようだつた。彼が奥に達するたびに、弟の名前が僕の中に響く氣がした。

「も、やめっ…いけ、ないつ、あ、アア——」

「いける…」

伸ばした手を、彼は、恋人達がするように、指を絡めて握り返した。

「いや、ア、オつ」

涙で霞む視界で、ほんの瞬間、彼が大きな目を見開いた。

「ツ、あ、あ、あ、あ、あツ…!!!!」

落胆に曇る瞳に見つめられながら、全てが碎け散つてしまふようなエクスタシーに飲まれた。

デイヴィッドは、最後まで一度もいかなかつた。

僕の胸にしがみついて、彼は泣いていた。

息を潜めて、嗚咽を殺す彼の背中を、僕はただ、さすつ

デイヴィッドは変わらず、子供みたいに体を丸めて寝ていた。

疲れが滲む横顔も好きだと思いながら、目をそらした。その眉間の深い皺が消えるのは、彼がロンドンに戻つてから。僕ではなく、時間が解決するしかない。

せめて、その額やまぶたや、鼻の頭に口づけたい。けれど、忘れるがたくなる。

さようなら。別れを告げるつもりで髪に少しだけ触れて、振り返らずに部屋を出た。

その日、職場に行くと、皆に口々に労われた。

「昨日の今日だ、少しゆつくりすればいい」と気遣つてくれる同僚に、「こうしてるほうが気が紛れるから」と笑顔で返した。

その夜。脱衣所で服を脱いだ僕は、また、彼の痕を目の当たりにして息を飲んだ。

体中、至る所に刻まれたそれから、しばらく逃げることはできない。

鏡の中、首の痣から、左肩の爪の痕へ、左胸に残る歯型へ、指で辿つてみる。

目に閉じれば、背後で彼の乱れた吐息が聞こえ、乳首にこびりつく声を、顔を洗つて振り切つた。

顔を上げれば、鏡には、酷く疲れきつた僕がいた。寝不足でクマが色濃く、重ねすぎた唇は赤く腫れている。

もう一度、見える範囲に2つ、赤く刻まれたそれを直視した。互いに与え合つた愛撫の痕に、今頃、彼は何を思つているのだろう。それこそ昨日の今日のこと。彼を想わずにいられないが、もう、過去のことだ。

デイヴィッドを頭から締め出せば、後は、しばらく彼女に会うわけにいかないと思うだけで、他に何もなかつた。

「…」

体の奥に熱が生まれて、思わず床にしゃがみこんだ。これ以上、鏡の中のふしだらな自分を見たくなかつた。彼の香りや、僕の中を上下するペニスの快楽を思い出しながら、自分の体を抱いた。

アヌスの慰め方がわからなかつたから、夢中でペニスをしごき続けた。どれだけ力を込めても、彼の愛撫には遠く及ばず、虚しさを忘れたくてペニスを擦つた。忘れられないのではなく、忘れたくないんだ。

そう思い知れば、ますます彼への想いは募り、彼にさされたようにペニスを弄<sup>もあそ</sup>んだ。

それでも、もう出るものはなかつた。  
「…会いたい」

紛れもない本心が口をついて、やり場のない苦しみに呻いた。

「会いたい」

呟きながら、シャワーで汚れた体を洗い流した。

そして次の土曜日。

まるで、悪い夢の中を生きているようだつた。

弟の死と、馬鹿げた恋。

確かなものは、彼への強烈な慕情と、昨夜の鮮明な記憶だけ。

あの夜から、僕の日常は、ますます現実味がなくなつていつた。

\* \* \*

ふわふわとしたまま日々をやり過ごして、1週間がたつた。

体に残る情事の痕は、日に日に褪せる。

ついには痣が消え、彼の犬歯の柔らかな傷が薄く残るだけになつても、それをなぞつて自慰することをやめられなかつた。

昼に起き、所用をこなした夕方、来客を告げるブザーが鳴った。

ドアの向こうには、デイヴィッドが立っていた。

「…あ」

思つてもみない驚きと喜びで、咄嗟に声が出なかつた。

「やあ」

彼は僕を見ると困つたような笑みを浮かべ、気まずそ

うに視線を落とした。

「どうして、ここが——」

「あのパブの人が、教えてくれた」

「…どうして、来たの？」

「もう少しゆっくりこの町を見たくて…墓地にも行つ

てきた」

「そつか…」

「…少しだけでいい、その…あなたの顔を見たくて

もう終わつたこと。わかつていても、僕をまつすぐ見

つめる彼を拒む理由はなかつた。

「…コーヒーでも、飲んでく?」

僕は、彼をフランツに招き入れた。

お茶の用意をしかけた僕に、デイヴィッドは後ろ手に持つていた紙袋を差し出した。

「お茶ならあるんだ」

カフェのショッパーには、二人分のコーヒーとスイーツが入つていた。

「嬉しいな」

ミルクと皿類を用意して、彼をリビングのソファに案内した。

コーヒーをマグに移し、ミルクを入れてラテにした僕を、対面の彼は目を細めて見ていた。

「あなたが好きだといいけど…」

そう言つて彼は、チョコチップの乗つたバナナマフィンを僕に勧めた。

もしもかしたら、これは、弟が好んでいたんだろう。

気づかないフリをして「ありがとう」と笑い、「でもそつちのほうが好きだな」と、シンプルなドーナツをもらつ

た。

しばらくデイヴィッドは、黙り込んでいた。

「何かテレビでも見る？」と聞いても、「いいよ」と笑うだけで、うつむいてコーヒーを飲んでいる。

そして僕は、積極的に話せることなく、ドーナツを食べながら当たり障りのない話題を探していた。

ドーナツを食べ終えると、彼は「僕は甘いものはそう得意じやないから、よかつたら」とマフィンの皿を僕に押し出した。

「2つも買つてこなければよかつたのに」

「マフィンがハズレだつたから、いいんだ」

苦笑した彼は、一息つくと、思い切つたように口を開いた。

「……僕は、あなたに甘えてた」

「……」

心臓が跳ね上がって、デイヴィッドから目をそらした。

彼のことを毎日のように想いながら、いざ目の前にすれば、あの夜に向き合う心の準備はできていなかつた。

「……ごめん——」

「いいんだ、もう……謝罪はもらつた」

「こないだは——」

「僕こそごめん、先に帰つて、仕事があつたし——」

「こないだは、付き合わせて、ごめん……」

「いいんだ……」

「…………」

「済んだ、ことだよ……」

同意してもらえれば、虚しい恋に諦めがつけられる。

そう思つた。

「帰るよ」

そう言つて腰を上げた彼は、寂しく笑つた。

玄関のドアに手をかける手前で、彼は振り返つた。

神妙な、何か言いたげな唇を見つめながら、僕は笑顔を繕つた。

「ロンドンにはいつ？」

「明日、今夜は宿を取つてる……前と同じ」

「そか」

腕時計を覗くと、19時になろうとしていた。

「…飲みにでも行く？付き合える」

「いいよ、ここんとこ飲みすぎるから、今日くらい

控える」

「そつか——」

「それに、一人でいたほうがいいと思うから…」

「…そうは、思えないけど…」

また、甘えてくれてもいい。なんて、言えなかつた。

また、僕の気持ちを伝えるのは不謹慎な気がして、何

より、彼が求めているものは僕ではないことをよくわ

かつていたから、言えるはずがなかつた。

「デイヴィッド、君と会えて、よかつた…」

「…」

「君が、とてもとも、ハリーを愛してたつて、わかつ

てよかつた…」

「会いたかった」

「それと今なら…ハリーがどれだけ君を愛していたか、

よくわかるから…」

君は、まるでブラックホールみたいに“僕”を惹き寄せる。そして、ひとたび飲み込まれてしまえば、どんなに足掻いたって逃れられない。

「それがわかつて、よかつた…」

デイヴィッドは、大きな目を見開いて、僕を見ていた。

「…よくないかも、しれないけど…」

「つ…」

そして彼は、口にしかけた何かを言葉にする前に、僕に腕を伸ばした。

弾かれたよう抱き合つて、唇を噛み合う僕らは、ま

た、あの夜を繰り返してしまう。

\* \* \*

荒げた息で囁いて、彼は僕の服を剥いでいく。僕の頬を手で包み、愛おしく細めた目は、幸せそうに笑つて

い。

「会いたかった」

あの日、諦めた口づけを、彼の額からまぶたに、そして鼻の頭に落とした。彼の肌を剥いでいくと、あの香水が強く香った。彼の服を剥き出すと、シャワーを浴びていらない体は、あの夜より濃いオスの匂いがした。

「会いたかった」

寝室に辿り着く前に裸になつて、リビングのソファに纏れ込んだ。

「会いたかった」

彼の髪を指で梳いて、喘ぐ頭を強く抱きすくめた。吸

い込まれるように、僕を求める彼を抱く喜びに、嘘はつけない。

「舐めて」

体を起こし、ペニスを差し出す彼の足元に跪いた。

既に屹立した男根は、目の前にすればとても大きく、浮き出た血管はグロテスクで、自分のモノとは別物に

見える。あの夜から、何度も僕を狂わせたコレが欲しい。伸ばした舌で裏筋を舐め上げると、彼は口の端を上げた。

汗と鼻につく匂いは、彼のモノと思えば淫らな欲望を呼び起こした。舌で迎えながら唇を被せれば、彼は溜息をつき、僕の頭を強く撫でた。

深く吸い、舌でくすぐりながら口から抜いて、唾液を絡めて咥え込む。するすると溢れた先走りは、しそつぱい。彼の目を見ながら飲み込むと、彼は幸せそうに笑つて、僕を呼んだ。

今夜の彼は、まるで人が変わつたようだつた。僕を探る指は強引で、口づける唇は荒く、舐める舌は激しい。開いた脚を押さえ込まれ、舐めて濡らした指がアヌスを割つた。

「あ…」

先走りが垂れた僕のペニスを、彼は舌先で突いて焦らす。

「欲しい……？」

内腿の肉を吸いながら、彼は意地悪く笑つた。

頷くと、2本に増えた指でアヌスをこじ開けられる。

「んッ、ア……」

ねじ込まれた指の先が、待ち望んでいた快感をくれる。

交互に揺らす指が拡げるそこから、くちくちと卑猥な音が漏れている。

もつと、もつと。腰を浮かせば、彼は嬉しそうに笑い、指を搔く力を強めた。

「ンおおッ」

「僕が欲しい……？」

「ほしいッ……」

手を伸ばすと、彼は僕の親指から小指へ、ひとつひとつに歯を立てて、いやらしくしゃぶつた。

「自分でシコつて」

初めて交わる角度の快感に囚われた僕は、はしたなく腰を振り、彼にイイ所を擦りつけた。

「どうやつて？」

深く、浅く、腰を回しながら、弄ばれる衝動を慰めたくて、ペニスに指をかける。

「きみも、さわつてつ……」

劣情を剥ぎ出した彼は、拘束具のように僕を抑え込み、獸のように腰を振つた。

それでも熱く滾つてしまふカラダは、恥ずかしいほど、

ねだつた唇を、薄く笑う唇にねじ伏せられる。

彼に求められる悦びに飢えていた。

四つん這いで突き出した尻を打たれ、支配される錯覚に喘いだ。腰から背へ、そして肩へと、犯すような愛撫に染められていく。顎を掴まれて顔を向け、舌を伸ばしてキスをする。角度が変わり、突き下ろされる男根に僕のペニスが限界を迎える。

「い、ぐつ……」

右足を抱え上げられてイきそびれた僕に、彼は容赦なく腰を打つ。

初めて交わる角度の快感に囚われた僕は、はしたなく

彼は強くサオを握り、望み通りにしごいてくれる。自

分のモノを弄るより、彼の手を感じたい。彼の指を探りあて、絡めた指で、先走りに濡れるペニスを擦つた。

腰を早め、ペニスの裏を捏ね始めた彼は、まるで僕の何かもをお見通しだった。

「ツ、ぐうつ……つ！」

恍惚に打ち震える舌を、息が止まるほど貪られる。

ガクガクと跳ね上がる腰の中で、僕は、愛しい彼を強く締め上げた。

体位を変えて、交わる角度と深さを変えて、幾度となくカラダを繋ぎ続けていた。

今日まで知らなかつた彼を知りながら、我を忘れて愛撫の痕を与え合つた。

強く抱き締め合つて、殴るように腰をぶつけ合い、小

刻みに擦り付けるだけで、天に昇るほどハイになれた。

嗜み合わないはずの凹凸が溶け合い、ぐずぐずと吸いつく粘膜が、このまま剥がれなければいいと思つた。

「…言つて、欲しい」

頭を抱いて、首を抱いて、頬に触れて、背筋をなぞりながら。

「あいしてる」

何度も、目を見て、本心を囁き続けた。

そして今日も、どれだけ僕が絶頂に達しても、彼が達することはなかつた。

僕のベッドで、あの夜のように、デイヴィッドの頭を胸に抱いていた。

彼は泣いていなかつたが、ただ黙つて、僕の胸に頬をなすつていた。

「…何も、考えなくていい」

あの夜、彼が僕に囁いた言葉を呟いていた。

小さく頷いた彼は、また、僕の胸に頬をなすつた。

デイヴィッドが眠りに落ちるまで、僕は、彼の髪を撫で続けていた。

\* \* \*

て、僕は、目をそらした。

目を覚ますと、昼前だった。  
不自然な左腕の重みを見ると、デイヴィッドが僕の腕  
を枕に寝ていた。

彼がまだいてくれたことが、嬉しかった。

デイヴィッドが起きたのは、昼過ぎだった。

「寝過ぎた」と顔をしかめる彼に、ブレックファスト  
を用意して、一緒にテーブルを囲んだ。

昨夜から何も食べていない僕らはすっかり空腹で、彼  
も僕も、トーストを追加し、目玉焼きを4つ平らげ、  
コーヒーのおかわりをした。

「食べ過ぎた」と懐のキヤッショを探る彼に、「いらな  
い」とやめさせた。

「ありがとう」と笑う彼も、僕も、まつすぐ目を見る  
ことができた。

それでも、彼の口元には何かを言いたげな翳りが見え  
ていた。

3時になる頃。シャワーと身支度を済ませたデイ  
ヴィッドは、玄関に向かつた。

ドアに手をかける手前、昨日のように振り返ったその  
顔は、こちらが辛くなるほど苦しかった。

「…もう、来ないよ」

抑揚のない声が、胸に突き刺さつた。

「…僕は、あなたに酷いことをしてる…」

「…」

「どうしても、あなたに…ハリーを重ねてしまうんだ  
…やめられない」

「…」

「こんな酷いこと、もう、したくない、申し訳ない…」

「…」

「本当に、本当にごめん…」

苦しく顔を歪めながら、言葉を絞り出すデイヴィッド  
を見ていた。

「僕が…僕がハリーじゃないなんて、わかりきつてるだろっ…」

気がつくと、僕は、泣いていた。

僕の涙に、彼は、はっと息を飲んだ。

「君が本当に酷いのは、僕にハリーを重ねてるからじやない…」

「…」

「君は僕にハリーを重ねて、失望して、自己憐憫に浸る惨めな自分に勝手に苦しんでるんだろ…」

涙でぼやけた視界でも、彼が青ざめるのがわかつた。

「…僕は、僕として、君が好きだ」

「…」

「君とハリーがどれだけ愛し合つてたかとか、世界で一番幸せだったかもそれなくとも、そんなの僕には関係ないつ…どうだつていいんだ」

「…」

「君はそんな僕に気づきも、見ようともしない…」

「…」

「僕の気持ちなんかお構いなく、君は僕を使って勝手に苦しんでる」

「…」

「…それが、どれだけ僕を傷つけるか…君はつ、少しでも、考えた…？」

「…」

震え始めた僕の声音に、彼の顔が強張つていくのが見えていた。

「…『傷ついてる』なんて、言いたくなかったつ…」

「…」

「…君にほんの少しでも『見て』ほしいなんて思つてる僕は、惨めだつ…」

「…」

涙が溢れて止まらないのは、たつた今、ようやく、弟がこの世にいない事実と、その弟を愛した男は、どれだけ手を伸ばしても届かないという現実を受け入れたからだつた。

「…本当に、本当に、ごめん」

顔を伏せたまま、こちらに背を向けたディヴィッドは、

静かにドアの向こうに消えた。

下げる気力はなかつた。いつか心の整理がついたら、

ちゃんと説明をする。そう言つて、通話を切つた。

こうして僕は、長い長い悪夢から唐突に目覚めた。

そして、墓地に出向き、ハリーの墓前で謝つた。

\* \* \*

僕は、酷い失恋をした。この先、二度と巡り合うことはないだろう、彼を知るほどに燃え上がる激しい恋

だつた。

あんなもの、恋にも満たず、失恋にもなりえない。ぱつかり空いた穴を埋め合つただけの、ただそれだけのこと、と思えたら、どれほど楽になれるだろう。

だけど、確かに、恋をしていた。

デイヴィッドが去つた後、僕は、悪い夢を整理し続けていた。したところで何がどうなるわけでもなく、気が緩めばまた、涙が溢れた。

僕は、彼女に電話で別れを告げた。直接会つて、頭を

本当に空っぽになつた僕は、この週、弟が死んでから初めて、休暇を取つた。

\* \* \*

まるまる休暇にしたこの週、僕は、ほとんど寝ているだけの怠惰な日々を過ごした。

そして次の土曜日。

昼前だというのに、来客を告げるザザーに叩き起された。舌打ちをして起き上がり、玄関に行つた。ドアを開けると、そこには、デイヴィッドがいた。

悪い夢は、終わらないのか。

一気に目が覚めた僕は、反射的にドアを閉めたが、彼

に押さえられて叶わなかつた。

無精髭が伸び、寝起きで髪もぼさぼさの酷い有様の僕は、恥ずかしくて顔を向けられない。

「話をしたいんだ…しなくてもいい、聞いてくれるだけでいい…」

ドアの隙間から聞こえる声は、切実だつた。

「本当は、ずっと…ずっと、あなたのことばかり考え

てた」

「…」

「マイケル、あなたのことだ」

「…」

「まだまだ、ハリーを忘れたわけでも、悲しみが癒え

たわけでもない、当然だ…」

「…」

「けど、葬儀の夜から、毎日、少しずつ少しずつ、あ

なたのことを考える時間が増えてつた…」

彼の言うことがうまく飲み込めなくて、頭の中で反芻

していた。

「今日、マイケルは朝起きてまず何をしたのか、どんなブレックファストを食べたのか、なんのテレビを見たのか、もしかしたら YouTube かなとか、職場でど

んなことがあつたのか、誰と何を話したのか、フットボーラーを観に行くのか、パズに行く時に雨に降られなかつたかとか…ずっと、気づけば、あなたのことばかり考えてた…」

「…」

「僕の知らないあなたのこと、知りたかつた」

「…」

「けど、連絡先を聞いてなかつたから…」

「…」

ドアをちゃんと開けると、彼の切羽詰まつた顔が少しだけ緩んだ。

「…僕は今週、休暇を取つて、ずっと家でゴロゴロしてたよ」

「…」

「少し疲れたから、たまにはいいか、つて…」

「…」

「まだ休暇中だから、そつとしておいてほし——」

「その、つまり」

僕の言葉を遮ると、デイヴィッドは後ろ手に隠してい  
たバラの花束を差し出した。

「マイケル、僕と、正式に、付き合つてほしい」

そんなにも真剣に。あんなファックをしながら、今更

堅苦しいなと、吹き出してしまってころだつた。  
「花なんて：墓前に手向けてきなよ——」

「さつき行つて、花も置いたよ」

「そう…」

真つ赤なバラが12本。本気のプロポーズで贈るやつだ。

こういうの、きっと、ハリーなら喜ぶんだろう。

…けれど、もう、弟は関係ない。

花束を受け取ると、涙がこぼれそうになつたから、な  
んとかこらえた。

まだ夢を見ているのかもしれない。胸がドキドキして  
いた。

「ランチでも、どうかな…？」

声を出せば、泣いてしまうのがわかつていた。

頷くだけの僕に、デイヴィッドは、ようやく笑顔を見  
せた。

\* \* \*

身支度を済ませると、もうお茶の時間になろうとして  
いた。

デイヴィッドと僕は、繁華街へと肩を並べて歩いた。  
初めて一緒に歩いたあの夜より、少しだけ距離が近  
かつた。

僕らが初めて言葉を交わしたパブで、遅いランチをし  
た。あの日はカウンターだったが、今日はテーブル席  
にした。  
彼は、「もつとおしゃれな所だつていいのに」と少し  
不満げだった。

「僕はまだ、半信半疑だよ」

そう答えると、彼は「そか」と眉を上げ、「仕方ないな」とギネスに口をつけた。

「ロンドンには？」

「明日帰る」

「あのホテル？」

「そう」

「君つて、マメだね」

「？」

「わざわざ出向いてさ」

「たつた2時間半だ、寝てれば着く」

「往復したら5時間だ——」

「あなたのためなら来るよ」

ローストビーフを平らげたディヴィッドは、「当たり

前じやん」みたいな顔で笑った。

けろりとした顔は、憎らしいほど愛らしくて、やっぱり、彼が好きだと思う。

パブを出た僕らは、メインストリートを北へブラブラ

「誰のおかげだよ」

歩いた。

デイヴィッドと僕の距離は、先程より少しだけ縮まっていた。

特にどこに行くとも決めずに、この町で一番大きな公園に行つた。

ハリーの訃報が届いてから、約1ヶ月半が経とうとしている。園内のあちこちでは、春の訪れを告げる花々が咲いていた。

「春だ」

「鳥、めちゃめちゃ鳴いてる」

「恋の季節だからね」

「僕達と同じだ」

「それはたまたま」

「サクラ、きれいだ」

「すぐに散っちゃうから、見れてよかつた」

「あなたは引きこもつてたんでしょ、いいタイミングだつた」

「ロンドンじゃ先週満開だつた」

「人の話聞いてる?」

僕らは、見たままや思ったことを口にしながら、散歩をした。

午前の雨に濡れた芝生はみずみずしく、青い土の匂いがしていた。

ベンチの水滴を拭つて、少し休憩をした。

デイヴィッドと僕の隙間は、また、少しだけ縮んでいた。

「こういう話は、しないほうがいいのかも知れないけど――」

「ハリーのこと?」

「……そう」

彼は、複雑そうに下唇を噛んでいた。

「そういう扱いをされるほうが、弟は嫌がると思うよ」

「そか……」

「……」

「……ハリーは、僕達のことを知つたら、怒るかな」

「手、繋ぐ?」

「ただ歩いていた。」

「……そうだな、めちゃくちや怒るだろうな」

「……」

「でも、僕が彼なら……最終的に、君が幸せならそれでいい、と思うと思う」

「…………」

「……それに、彼が僕なら、同じことをしてた……きっとね」

「……」

「彼なら、もつと早く、うまいこと君となるようになつてただろうけど……」

「そうかな」

苦笑した彼は、細めた目で僕を覗いた。

「……こんなところでキスなんてしない」

「そう」

「お茶でもしに行こう」

「僕らは、来た道を引き返して町へ向かつた。」

腕が触れそうな近さで、デイヴィッドと僕は、肩を並べて歩いていた。

さり気なく強引なところは、彼の長所だろう。

「…まだ、なんだか、恥ずかしいから…」

「そか」

「君、距離詰めるの早いな」

「そうかな」

不思議そうに目を丸めてる彼も、好きだと思つた。

「ジエラートを食べに行きたい」

最近、この町に新規出店したカフェの名を出すと、彼の反応は「ああ」と薄かつた。

「ロンドンでたまに行く」

「僕は知らない」

「おすすめのトップピングを教えてあげる」

「たぶんそれは、僕好みじゃない」

「ねえ」

「？」

「…今夜、あなたの家、泊まつていい？」

「……いいよ」

「嬉しい」

デイヴィッドは、どさくさに紛れて僕の手を握った。  
そしてそのまま、僕らは、カフェへの道をゆっくり歩いた。

(おわり)

## かいせつ

「Scratch (with 稲葉浩志)」／TK from 凜として時

雨のインストロのピアノを聴いたら降りてきたお話を  
いう、謎のひらめき発動系? の一作です。  
なのでタイトルはそのまま「scratch」にしたのです  
が、お話の内容と全然関係ないので気にしないでくだ  
さい！

シンプルに、理屈じゃないドドドともない一目惚  
れをしたら体の相性も最高～みたま～、ある部分理想  
的なふたりの恋模様を書くのが楽しかったものです。  
読み返すとスケベが結構えっちで気合はいつてたのが  
わかります。  
が、弟の死が起点にあるので、罪悪感に苦しみつつも  
堕ちていき：最後はこれでいいのだと自分に言い聞か  
せて前を向くしかない、そんな、大人の恋となつてお  
ります（？）。

アップしてみたら、この二人、この先大丈夫なの?と  
心配をいただいてしまつた一作で、大丈夫だよ～とい

うのはガイドpdfで書いたのですが、ここでも念の為  
の説明をしておきます。

結論から言うと大丈夫です！ この後、1年もしたら  
dさんカーディフに越してきて結婚します！ それま  
では、毎週末dさんが泊まりに来ます。初めのうちは  
mさんがまだ葛藤してたり、すれ違いがあつたり、d  
さんがうつかり元彼に対する感覚でズレた接し方をし  
てちよいちよい喧嘩に発展しますが、仲直りHすれば  
大丈夫、翌日には「離れたくない」とか言つてる。

最終的に、蓋を開ければ、弟よりもmさんのほうが性  
格的に結婚向きだったのです、ハッピーご都合設定○  
相手の顔が大好き、体の相性も最高、お互い以外の誰  
かなんてもう考えられない。  
□で好き放題いろいろなふたりを書いています  
が、このカツプルは始まりこそ難局でしたが、それさえ乗  
り越えてしまえば、ごく平凡で一般的な、ゆえに幸せ  
過ぎるふたりなのです。

（2022年3月2日 pixivに公開）

## **Hummingbird**

---

「僕には前世の記憶がある」と言うと、大抵の人は面

白がり、話を聞きたがった。

誰もがそう考える。  
だから僕は、ひとりでいることを選んだ。

「僕には100の前世の記憶がある」と言うと、多く

は苦笑いで「冗談だろ」と返した。

そして僕は、その“事実”を誰にも言わなくなつた。

厳密には、必要に応じてかかりつけの精神科医に話す  
こともある。

けれど、記憶の概要をざつくり話したのは、せいぜい  
初診とその後の2、3回程度。「非常に稀なケースだ  
ね」と眉をひそめたドクター曰く、僕は「妄想障害」  
らしい。もう長いこと通つているが、カウンセリング  
では心身の好不調の報告をするだけ。

今日もいくつかの薬を処方されたが、いつものよう  
に、たまに役に立つ抗不安薬と睡眠薬を残して他は捨  
てた。

正常なのは、自分が一番よくわかっている。  
「頭のおかしいヤツほど、自分が正常だと言ふ」

その人が初めて僕の店に現れたのは、サクラの花が散  
り、バラの蕾が今にも花開こうとしている春の午後  
のことだつた。

僕は、ロンドンの北、セント・ジョンズ・ウッドで小  
さなカフェを営んでいる。地下鉄駅を挟んでアビー・  
ロードと反対のエリア。メインストリートを一本入つ  
た閑静な住宅街の5軒目にある僕の店に、地元の常連  
を除けば新規の客が来ることは稀だつた。

気後れしたようにドアを開けたその人は、店内を見回  
し、カウンターの僕と目が合うと、少し驚いたような  
不思議そうな顔をした。そして何度か瞬きをして、懷  
かしむような笑みを浮かべて僕を見つめた。

「…いらつしやいませ、お好きな席へどうぞ」

咄嗟に口につきかけた「あなたに逢いたくなかった」を笑顔に隠して、僕は『彼』を招き入れた。

この日は土曜日。二人掛けのティーテーブルが7つの狭い店内には、先客が3人いた。窓際の席に掛けたその人は、「とりあえず」とブレンドを頼んだ。

深い焦げ茶の髪と、緋色が混じる明るいブラウンの瞳のコントラストが綺麗だった。コーヒーカップを彼のテーブルにサーブすると、彼は僕を見上げて小さく笑った。

利発そうな大きな目と、愛嬌が浮かぶほころんだ口元は、とても優しそうだった。

胸を突き破りそうな「あなたに逢いたかつた」を会釈に変えて、僕はカウンターに戻った。

その人は、2時間ほど店にいた。彼はペーパーバックを開き、時折スマホを覗いていた

が、気づけばその視線は店内や僕を忙しく往復していた。興味深そうに瞬く目元は少年のようで、好奇心を抑えきれないよう見えた。

彼はコーヒーのおかわりを2杯頼み、3杯目のカップをサーブした僕に、気まずそうに「長居をしてすみません」と謝った。

「お構いなく、好きなだけゆつくりしていくください」と答えた僕に、彼は初めて「ありがとうございます」と碎けた笑顔を見せた。

思わず涙ぐんでしまったのに気づかれないように、慌てて彼に背を向けてカウンターに戻った。

「また来てもいいでしょか」

会計を済ませた彼は、なにかバツが悪そうに視線を反らし、わざとらしく腕時計を見ていた。

目の前に立たれると、少し見上げるほど上背がある。そのよく知った感覚に気づかないフリをして、僕は「もちろん」と笑った。

彼はほつとしたように表情を緩めると、「ごちそうさま」とレジスター脇のグラスにチップの1ポンド硬貨を入れた。

ドアを出していく背中を見送った後で、僕は、避けられない“未来”を思つて少し泣いた。

そして、彼のチップの硬貨を拾い、別の箱に移した。

\* \* \*

その2日後の月曜日。

19時半を過ぎた頃、その人はやつてきた。

この日の彼は、春らしいクリーム色のジャケットに紺

の差し色のボタンダウンシャツ、スラックスというオフィスカジュアルの出で立ちで、レザーのバッグを持っていた。一見して仕事帰りだとわかる装いは、先日のラフな格好から一転して大人びて見えた。

「いらっしゃいませ」と迎えた僕に、彼は「こんばんは」とはにかんだ。

その声は、まるで「ただいま」と言つているように聞こえた。

先日同様、彼はブレンドを頼み、2杯おかわりをした。そしてペーパーバックは読まず、スマホの代わりにタブレットPCで何かの作業をし、その合間に僕や店内を眺めていた。

3杯目をサーブしながら「お仕事、忙しいんですか?」と聞くと、彼は「繁忙期で」と苦笑した。

僕は、その小さなかわいらしい嘘を、「どうぞごゆつくり」と笑顔で許した。

閉店は21時半。

会計を済ませた彼は、「長居してすいません」と苦笑した。

「…職場は、この辺りなんですか?」

「ええ…ああ、グリーン・パークのあたりです」

僕の問いに目を丸めた彼は、慌てて懐から名刺を取り出した。

そこに書かれた名は知らなかつたが、『彼』同様、愛おしく思つた。

「…インテリアデザイナー？ 素敵なお仕事ですね」

「雇われですよ」と謙遜した彼は、僕の差し出した名刺をそつと受け取つた。

「…デイヴィッドさん、言いたいことはわかりますが、内装は変える気がないので営業をかけられても困ります」

初めて呼んだ彼の名は驚くほど口に馴染んだが、驚くことでもなかつた。

「そんなつもりはありません」

僕の名刺をじっと見つめていた彼は、苦笑して名刺を懐にしまつた。

「とても…興味深いですよ、それに、不思議と落ち着あます」

「そう言つていただけて、嬉しいです」

「『Nightbird Cafe』の名前通り、遅くまでやつてくれていて助かります」

そう微笑む彼は、懐かしそうにどこか遠くを見ていた。

「…お住まいはこの辺りですか？」

「いいえ、ザザークです」

「…」

彼の職場からここまで、地下鉄で北に7駅、自宅までは職場から南に3駅。逆方向でも、『彼』と『僕』を隔てる距離を思えば、些細なものでしかない。

「じゃあ…マイケルさん、おやすみなさい」

彼はニコリと笑うと、チップの1ポンド硬貨を置いて店を出ていった。

そして僕は、その硬貨を先日の箱にしまつた。

\* \* \*

その日から彼は、毎日僕のカフェに訪れるようになつた。彼が来るのは19時から遅くとも20時、常連客が帰る頃合いで、僕はほぼ毎日、店じまいまでの静かな時間を彼と過ごすことになった。

彼は決まつてブレンドを頼んだが、その週の水曜日、  
僕は黙つてキリマンジャロのアメリカンを出した。

彼は何も言わなかつたが、マグに口をつけると「美味  
しい、好きです」と微笑んだ。

「口当たりが軽いから、飲みやすいですよ」  
長居を気にしておかわりをする彼を慮り、おかわりは  
しなくていいというつもりで大きなマグカップで出し  
たが、彼は結局おかわりをした。

その週の金曜日。

夕方から静かな雨が降り続いていた。

20時を過ぎた頃に現れた彼は、目につく程度に濡れて  
いた。

「あの、絵…」  
彼がまつすぐ見つめる対面の壁には、ある絵が掛けて  
あつた。

「とても好きです、どこだろ…」

「あれは、『Nightbird』です…僕が描いた、下手です  
が…」

「Nightbird？」

月が映る小さな泉の風景画を見つめる横顔は、不思議  
そうだった。

「どうの昔になくなりました、恐らく今は、ありませ  
ん…僕の中にあるとしか…」

「あなたの、中…？」

自分のマグとビスケットを用意して、彼の隣のテーブ  
ルに掛けた。

「ビスケット、よかつたら食べてください」

「ありがとうございます。ちょうど小腹が空いていました」とは  
にかんだ彼は、頬張った菓子を飲み込んで一息つくと、  
口を開いた。

「あの、絵…」  
彼がまつすぐ見つめる対面の壁には、ある絵が掛けて  
あつた。

「とても好きです、どこだろ…」

「あれは、『Nightbird』です…僕が描いた、下手です

が…」

「Nightbird？」

月が映る小さな泉の風景画を見つめる横顔は、不思議  
そうだった。

「どうの昔になくなりました、恐らく今は、ありませ  
ん…僕の中にあるとしか…」

「あなたの、中…？」

僕はタオルを差し出し、いつもの窓際に掛けた彼にキ  
リマンジャロを出した。  
21時を過ぎた頃、おかわりのマグをサーブした僕に、  
彼は「少し、いいですか」と小さく尋ねた。  
客は、彼しかいない。僕は「いいですよ」と答えて、

彼は決まつてブレンドを頼んだが、その週の水曜日、  
僕は黙つてキリマンジャロのアメリカンを出した。

彼は何も言わなかつたが、マグに口をつけると「美味  
しい、好きです」と微笑んだ。

「口当たりが軽いから、飲みやすいですよ」  
長居を気にしておかわりをする彼を慮り、おかわりは  
しなくていいというつもりで大きなマグカップで出し  
たが、彼は結局おかわりをした。

その週の金曜日。

夕方から静かな雨が降り続いていた。

20時を過ぎた頃に現れた彼は、目につく程度に濡れて  
いた。

「あの、絵…」  
彼がまつすぐ見つめる対面の壁には、ある絵が掛けて  
あつた。

「とても好きです、どこだろ…」

「あれは、『Nightbird』です…僕が描いた、下手です

が…」

「Nightbird？」

月が映る小さな泉の風景画を見つめる横顔は、不思議  
そうだった。

「どうの昔になくなりました、恐らく今は、ありませ  
ん…僕の中にあるとしか…」

「あなたの、中…？」

僕はタオルを差し出し、いつもの窓際に掛けた彼にキ  
リマンジャロを出した。  
21時を過ぎた頃、おかわりのマグをサーブした僕に、  
彼は「少し、いいですか」と小さく尋ねた。  
客は、彼しかいない。僕は「いいですよ」と答えて、

彼は決まつてブレンドを頼んだが、その週の水曜日、  
僕は黙つてキリマンジャロのアメリカンを出した。

「…このカフェは、『僕』が作っているんです」

「…詳しく、聞いても？」

こちらをじっと見つめる彼が、横目に見えていた。

彼を見ずに、僕は続けた。

「デイヴィッドさん…」

「…？」

「僕には、前世の記憶があります」

彼は、僕の言葉に驚くわけでも、笑うのでもなく、静かに僕を見つめていた。

「…僕には、100の記憶があるんです」

「…ぜひ、聞かせてください」

「…」

「差し支えなければ…」

そう言つて彼は、コーヒーに口をつけた。

「…全ては長くなるので、かいつまんでも話しましよう」

そう言つて僕も、コーヒーに口をつけた。

「…」

「そして、『僕』には、心から愛する人がいて…たびたび、情熱的な愛を交わしていました」

「…」

「その記憶が初めて現れたのは、15歳の春でした…ま

「そしてある日、戦争が起きました、近隣の隆盛国に

だその時は、それが記憶だとわかりませんでしたが…」

「…」

「それは突然、頭の中で、映画やドラマのような鮮明さで繰り広げられ、ぷつりと途切れた時には、僕は号泣していました」

「…」

「その時のそれを夢、とします。その夢の中で、『僕』はどことも知れない異国にいました。城壁の外は砂漠に囲まれ、遠くには砂嵐が吹いていた。埃っぽい路地にはマーケットが並び、人々は昼の暑気を避けて夕方以降に活動を始める、そんな国です。石造りの町並みや人々の装いに見覚えはなく、現代ではない、恐らくとても古い時代なのがわかりました。」

攻め込まれたのです。『君を護るために戦う』、そう言つ

て戦場に出向いた『彼』は、そこで命を落としました。

どす黒く変色した血にまみれた『彼』の遺体を抱いて、  
『僕』は絶望しました。』

「…」

「そのあまりにリアルな夢は、まだ子供だった僕を恐怖

のどん底に叩き落とすのに十分な生々しさでした。

当時の僕は、夢で見た異国や、具体的な性行為や、無

慈悲な暴力が引き起こす凄惨さもろくに知らなかつ

た。それなのに、我が身のことのように味わわされる

幸福と絶望、悲しみの衝撃は、想像を遥かに超えてい

ました。理解の及ばない激しい感情に圧倒された僕は、  
それから数日寝込みました。』

「……言葉も、ない」

うなだれた彼は、額に手をあてた。

「…不幸にもそれは夢にも繰り返し現れ、そのたびに

僕は泣いて飛び起きました：結局その一週間で5キロ  
も体重が落ちたあの頃は、人生でも最悪の時だつたと

思います。』

僕は苦笑して、コーヒーで喉を潤した。

彼はただ息を潜めて、僕の話を待っていた。

「その後、僕はその恐ろしい夢を誰にも言えずにいました。両親に言おうと思つても、性的な要素を省きようがないことを思うとできなかつた。要らぬ病気の疑いをかけられたかもしれませんし――」

「それで、誰にも？」

「ええ…ずつと、一人で抱えることしかできませんで

した」

「…」

「それから半年程たつた頃、依然その夢に苦しんでいた僕に、突然、2つ目の夢が訪れました。驚くべきことに、それは、1つ目の夢ととてもよく似ていた。それは、恐らくアジアのどこかという点や、僕らの身分

や生業は違つていたけど、同じく古い時代で、そして『僕』と『彼』は、ここでも深く愛し合つていた。しかしやがて戦争が僕らを引き裂き、『彼』は死に、『僕』

は絶望の淵に突き落とされました。」

「…」

「悪夢が増えて、どれも追い払うことができず苦し  
み続けました。忘れてくとも、まるでついさっき見て  
きたことみたいにハッキリと脳裏にこびりついている  
んです、今も変わらずに…。」

「…ジーザス」

低く唸つた彼に、僕は小さく吹き出した。

「クリスチャンなのに、前世の話を信じるんですか？」

「…なんて言えばいいのかわかりませんが：あなた  
は、嘘は言わない」

ドキリとした僕は、彼からそらした視線を時計に流し  
た。

時間は、閉店が近かつた。

「…もう、閉店です」  
「…」

「楽しくない話をしてしまって、すいません——」

「また明日、来ても…？」

「…明日は、天気がいいといいですね」

テーブルに会計分の紙幣とチップの1ポンドを置いて、彼は帰つていった。

僕は、止めようがないカウントダウンの結末を思つて、少しお泣いた。そして、彼のチップを箱にしまつた。

\* \* \*

翌日の土曜日。晴天とはいかずとも、雲間に覗く青空  
が気持ちのよい日だつた。

彼は、連日のように19時を過ぎた頃に現れた。

彼以外の最後の客がいなくなつた20時過ぎ、僕は、自  
分のマグと一人分の軽食を用意して彼の隣に掛けた。

「ピザ？」と目を丸めた彼に「遠慮なくどうぞ」と勧め、  
「ビールもどうぞ、缶ですが」と差し出すと、彼は「さ  
さやかなディナーだ」と笑つた。

しばらく僕らは、黙つて小腹を満たした。

サイフォンのお湯ががこぼこぼ沸く音と、小さく絞つ

たジャズのBGMが、僕と彼の距離を縫い合わせるよう埋めていた。

僕がビール缶のタブを開けると、彼も缶を開けた。  
そしてそれを合図に、僕は口を開いた。

「…初めての夢が訪れてから3年の間に、僕は、10の夢を見ていました」

「…」

「10の夢からわかつたことは、国や場所や時代や細部は異なつても、登場人物とストーリーは一貫して同じ。いつどこにいても、『彼』の名前や顔貌や髪や肌や目の色が違つても、いつの『僕』も『僕』であるように、いつの『彼』も『彼』その人で、『僕ら』は深く愛し合ひ、最終的に戦争で『彼』は死に、『僕』は絶望するのです。」

「…」

「どうして同じストーリーばかり繰り返すのか、どうしてこの夢から逃れられないのか。この頃には逃げる

ことを諦め、「なぜか」を考えるようになつていてま

た・考へてもわかるわけがないのに…でも、必死に。…そしていつの間にか、夢の具体性と規則性から『これは現実にあつたことなのではないか』と思いつめるようになつていました。」

「…」

「そして5年うちに夢は50に増え、学生時代は、悪夢に追われながら、悪夢を紐解くことに囚われていく僕がいました。同時に、この頃は新たな夢が現れる頻度が増し、心はそのたびに蝕まれていきました。夢の内容は一貫していても、あまりにも鮮やかに与えられる幸福と絶望はさまざまで、1が50になれば実際の苦しみは1が500に感じられるのです。」

「…せめて、誰かに頼れたら――」

「この頃から精神科に行くようになりましたが、それっぽい診断名がつくだけで、理解されない事実も、辛かつた…」

「それっぽい？」

「…妄想障害、一般的には、それで片付けられてしま

います」

「…今も、通院を？」

「ええ、2～3ヶ月に一度、雑談するだけ。…時々情緒が不安定になつてしまふので、そういう薬を処方してもらえる、そのために行くようなものです。」

うつむく彼の横顔を視界から追いやつて、僕は壁の絵を眺めた。

「そしてある時期、輪廻転生という言葉を知つた僕は、『これらの夢は全て、”僕の前世の記憶”なのだ』と確信しました。根拠はありません、でも…わかるんです。間違いなく”そう”なんだ、つて。」

「誰か、友達とかには――」

「話しても、まともに受け止めてくれる人はいなかつた…だから、誰に話すこともなくなりました」

「…」

「それからです、僕は、”僕”の記憶とうまく生きていこうことに決めました」

「…うまく？」

「気づけば僕は、記憶の辛さに振り回されているうちに、まともに社会で生きられなくなつていきました…どこかの企業に就職するとか、そういう人並みなことをする余裕なんてなかつた…」

「…」

「けれど、記憶は辛い反面、それだけの幸福があります…幸せな部分だけ切り取つて、それらのピースを集めたものが、ここです。お茶やお酒を飲みながら、”僕”と”彼”がただ語らうだけで幸せだった時間が、記憶の中にたくさんあります。」

「…」

「…あの、絵は？」

ぽつりと尋ねた彼は、静かにビールに口をつけた。

「…”僕”と”彼”が最も輝いて、とても幸せで…その分辛かつた時のものです」

「…」

「おそらく紀元前100年頃、”僕”は砂漠の端の小国の王で、”彼”は才覚溢れる将校だつた。”僕ら”は夜

になると、人目を忍んで名もないオアシスに出かけて

は愛し合う。そこには小さな泉があつて、泉に満月が

映る眺めはとびきり、どんな宝石よりも美しかつた。

“僕ら”はそこを Nightbird と呼びました、夜にこつそり出歩く自分達に重ねて…ふざけ半分…ふたりだけの合言葉だつた。」

彼が、重い溜息をつくのが聞こえた。

僕のビールは、気づけばもう空に近かつた。カウンター

に戻り、彼と僕のコーヒーを淹れて戻つた。

マグを受け取つた彼は、軽く頷いて僕の話を促した。

「…結末は同じです。大国に攻め込まれて“彼”は死に、Nightbird も無残に踏みにじられてしまつた。分厚い歴史書の1ページにも満たない短い歴史の、誰も聞いたことのないような小さな国のことです。」

「…」

「僕は、さまざまな記憶を理解して受け止めるために、

歴史の本を読んだり、博物館や美術館に行きながら、“僕”に繋がる情報や物を集めようになりました…

できる範囲でですが」

「…」

「例えば、あそこにあるのは中国の清時代の香炉を模したもの、あれはタイの扇子、スウェーデンの木彫りのデカール、ネイティブアメリカンのナイフ、一次大戦の頃のトルコのランプ、スペインの燃えるような太陽と丘の写真…場所も、年代もバラバラな物ばかりですが、全部、“僕”なんですよ…」

「…」

「…だから、あなたがインテリアデザイナーって知つて、少し恥ずかしかつたんです、壁紙も床のタイルも、装飾品の雑貨も絵も何もかも、ちぐはぐだつてわかつていますから………」

彼がおかわりのコーヒーにろくに口もつけず、険しい

ような顔で壁を見つめているのに気がついた僕は、何か急に恥ずかしくなつた。

これまで僕は、“僕”的話を、ここまで詳細に誰かに話したことは、一度たりともなかつた。

「随分、話しそぎてしました…」

腕時計を見ると、あと5分で閉店時間になろうとしていた。

「…もう、閉店です」

彼は静かに腰を上げると、多すぎるコーヒー代をテーブルに置いた。

「突飛な話ですから、信じてくれなくとも――」

「僕は、あなたを信じます…」

僕を見下ろす彼は、まるで僕を慰めるように優しく笑っていて、僕は、胸が詰まつた。

「明日は…」

「日曜は、休業です…」

「マイケルさん、ごちそうさまでした」

「…」

「おやすみなさい」

彼は、チップの1ポンド硬貨をテーブルに追加して

帰つていた。

視界は涙でぼやけて、取り上げた硬貨がよく見えな

かつた。

“僕”を唯一理解してくれる“彼”は、いずれ消えてしまう。

そう思うと、涙をこらえることができなかつた。

\* \* \*

翌日の日曜日。

昼に起き、いつものように買い出しに出かけ、店に戻つた18時頃。僕のカフェの店先には、僕を待つ彼がいた。

「こんばんは」

彼は、大きな紙袋を両手に掲げてみせると、「ホールフーズに寄つてきました、一緒にディナーでもいかがですか？」と照れくさそうに笑つた。

そう、“彼”は、たとえどんな困難や障害が待ち受けているよりも、目標へまつしぐらに突き進む人だ。

「…コーヒーは、いらなそうですね」

僕は精一杯の笑顔を作つて、彼を店内に招き入れた。

「サーモンが好きです」

ベイクドポテト、マカロニ、ローストビーフサンド、  
チキンサンド、トルティーヤのラップサンド、ラザニア、  
ア、たくさんのスシ、コンキリエとツナのサラダ、ミー

トローフ、ブロッコリーと豆のサラダ。

彼がデリを並べていくと、すぐに2つのテーブルがパンクした。

「こんなに、食べきれませんよ」

思わず笑つてしまふと、彼は構わぬ。「好きなものを好きなどうぞ」と笑い、残りのデリを、もう2つのテーブルに全て並べた。

コニッキュパステイ、ベーグル、ピザ、パエリア、

タンドリーチキン、芽キャベツとベーコンのソテー、

ジエノベーゼ、サーモンのグリル、エビの点心、ビー

フン、オリーブ盛り、フルーツ盛り。

「これだけあれば、あなたもきっと満足するはず」

得意そうに眉を上げてみせる彼の無邪気さを、愛しく思つた。

「思つたより普通ですね：うつかりしてた、白ワインを買つてくるんでした」

ひょうきんなくらい鼻筋に皺を寄せた彼も、愛しいと思つた。

「チャイニーズも好きですよ」

「それはよかつた、点心は5個なので、あなたに3つあげましよう」

朗らかに笑う彼はとても、とても素敵で、当たり前に縮まっていく距離が嬉しい反面、その早さが辛かつた。そして僕らは昨夜と同じビールをグラスに開け、肩を並べてディナーの席についた。

彼も僕も、食べたいものを好きなだけ、好きなようにつつきながら、思いつくままにぱつぱつと会話を繋げていた。

「僕は土日はだいたい昼まで寝ていて、ネットをしながら映画やドラマを観たりするだけのだらしない休日

を過ごしています」

「インテリアデザイナーなのに？」

「デザイナーと名のつく者がみんな洒落た生活をしてるわけじゃありませんよ」

「少し、幻滅しました」

「残念」

「冗談です……このビーフン、とても美味しいです」

「……本当にですね……でも、ダラダラしてるだけでもなくて、時々、近所の犬の散歩に行ったりします」

「近所の？」

「そう、高齢のご夫婦の飼い犬です、ポインターなのでのびのび走らせてあげないと。手伝い半分、僕の運動も兼ねつつです。」

「それはいいですね」

「犬を飼いたいけど、平日は十分に時間を取つてあげられませんから」

「それ、僕も同じです」

「チーズ盛りも買つてくるんだつたな……」

「僕は日曜は買い出しに行きます、食品のマーケットをハシゴするのが楽しみで、だから、普段よりよっぽど早起きです」

「コーヒー豆だけじゃないんですか？」

「いろんな国の食材や調味料を見てるだけでも楽しいんですよ」

「ああ、納得がいきます」

「……」

「すいません、つい、あなたを知つたつもりになつて

いました」

「いいんです……構いません」

「……先週、初めてここに来たのは本当にたまたまでした、次のクライアントのテナントが近くにあって、近隣の下見がてら……」

「恐る恐る、みたいな感じで店内を覗いた顔、よく覚えてますよ」

「運命、です」

「……そういうの、信じるんですか？」

「もちろん」

「…ところでこの店、あまりにも統一感がないので、

BGMはせめてカフェらしくジャズにしています」

「自分で統一感がないって言うんですね」

「本当のことですから…」

テーブルを埋めるデリの3分の1がなくなつた頃。

彼は3本目のビールを開け、缶のままぐいと一口飲んだ。

「…マイケルさん」

改まつて少しトーンを落とした声に、僕は口に運びか

けていたフォークを下ろした。

「…こうしているだけで、あなたのことが、ますます

好きになります」

唐突な言葉に、どう答えればいいかわからなかつた。

予期できていたことなのに、胸は早鐘を打つてゐる。

「…コーヒー、淹れますね…」

席を立ち、彼に背を向けると、腕を思わず力に掴まれた。

「…」

振り返ると、彼が僕の目の前に立つてゐた。

「マイケルさん、僕も、あなたに話すことがあります」

怖くてその目を見られず、強い意志が浮かぶ唇を見つめていた。

「…僕は、あなたに逢うために生まれた」

「…」

「それだけです」

「…」

「…あなたも、わかつてゐはずだ」

「…」

「だから、僕に話してくれた」

「…僕は…」

左肩に伸びた彼の手を、反射的に振り払つてゐた。

「…あなたに、逢いたく、なかつたつ」

こらえていた激しい何かが喉にこみあげ、視界がぼやけた。

ついにこぼれ落ちてしまつた涙にいたたまれず、顔を

伏せた。

「どうして——」

「あなたは、僕を残して逝つてしまつ——！」

恐れていたことを口にすると、涙が後から後からこぼ

れ落ちた。

「あなたを失つたら、きっと、もう、その苦しみに耐

えられない……」

汗が吹き出し、視界にノイズが混じり始め、音が消え

る。苦しくて、息ができない。

「……ならば、いつそ、逢いたく、なかつ……」

そこで、意識がブラックアウトした。

\* \* \*

気がつくと、ベッドの中だつた。

見回すと、自分の寝室だとわかつた。

ベッドの端に掛けた彼が、僕を覗いていた。

薄明かりの影になつていても、その顔が曇つているの

がよくわかつた。

「……気分は？」

彼は優しく声を潜めて、僕のこめかみに指の背でそつと触れた。

「……あなたが、ここに？」

「……気にしないで」

「……」

「……」

「……心配だから、朝までいるよ……ゆっくり休んで」

「……大丈夫」

「水、持つてくる」

水差しとグラスを持つて戻つた彼は、ベッドに掛け、

そのまま僕に背を向けていた。

しばらく、彼も僕も、互いにかける言葉を探していた。

頭がぼんやりして、思考がままならない。

僕は、悲しくてたまらなくなつた。

「……ごめん、なさい」

言葉と一緒に、また、涙がこぼれた。

振り返つた彼は寂しく笑つて、また、僕のこめかみに



「…」

「…あなたを、信じたいから…」

薄明かりの中、彼は見逃してしまいそうなほど小さく頷いて、そして、僕の手を強く握り直した。

「…」

「店の名前とあの絵だけ残して、新しく、始めるんだ…」

\* \* \*

彼に抱かれて、夢うつつを彷徨つてている。

僕を包む温もりはどこまでも優しく、委ねた体が吸い込まれていく幻に酔う。

時々、ふと涙がこぼれて、そのたびに彼は、僕を抱く

腕に力を込めた。

彼の心地よさが、麻酔のように僕の痛みを麻痺させていく。

「…マイケル」

「…」

「…ふたりで新しく、カフェを始めよう」

囁く声は、秘密の企みを楽しむように、どことなく弾んでいた。

「あなたと僕の、カフェだよ」

目を覚ますと、変わらず彼に抱かれていた。

僕の枕に埋もれて寝息を立てている彼を見つめていると、胸が苦しいほど締め付けられた。

僕は、デイヴィッドに恋をしている。確かに自覚できただことが、ただ、嬉しかった。

彼を起こさないように静かにベッドを抜け、コーヒーを作った。

「…」

マグを2つ持つて寝室に戻ると、デイヴィッドは目を覚ましていた。

「おはようございます、眠れました？」

「…まさか、ベッドは狭いし、無理な姿勢だったから

全然」

「わがままに付き合つてくれてありがとうございます」

「起こしてくれればいいのに」とボヤいた彼は、まだ

布団を被つてもぞもぞしている。

ベッドに掛けてマグを渡すと、彼は「ありがとうございます」と

体を起こし、「シャツが皺くちゃだ」と顔をしかめた。

「朝からちやんとコーヒー淹れてるの？」

「まさか、インスタントですよ」

「そつか」

「カフェをやつてたつて、プライベートは効率重視で

す」

「幻滅した」

「残念です」

「冗談」

彼はしょぼつく目を細めて、マグにちびちび口をつけている。

「…あなた、仕事があるでしょう、早く行つたほうが

「今日はサボる」

「繁忙期なのに？」

「なんとかなるよ」

つまらなそうに僕を見つめた彼は、のんびり大きなあ

くびをした。

「マイケル」

「…随分、馴れ馴れしいですね——」

「そうじやないほうが、もう、不自然だ」

ぐいとこちらに身を乗り出した彼が、ふいに、真顔になつた。

「…平気？」

僕を伺う口元が、僕を覗く強い瞳が、恋しかつた。

頷いて、マグをサイドテーブルに置いた。

そして僕らは、待ち合わせにしびれを切らした唇を、ゆっくり重ね合わせた。

彼は、僕の服を時間をかけて剥いだ。そして、胸の中  
心に押し付けた唇で「やつと捕まえた」と呟いた。

体に触れられたら、本当に“終わり”が始まってしまふかもしれない。

心のどこかで消しきれなかつた恐れを、脇腹から胸へ這う指の感覚が拭つていく。

知らない彼を知りたくて、僕は、何度もデイヴィッドの名を呼んで、囁く唇で彼を確かめていた。

彼の唇は僕の肌を滑りながら笑い、痛いほどの愛撫で、来世まで残るような痕を残していく。

彼を腕に抱ける喜びに気づくたびに、僕は、涙が溢れてしまう。

彼はそのたびに切なく笑つて、体を激しく繋げていても、器用に僕の涙を唇で拭つた。

座位に辿り着いた僕らは、互いを縛り付けるように抱き締め合つて、我を忘れて腰を振つた。

彼は僕の胸に頬をなすり、首を吸い、耳に愛を囁いては胸に辿つていく。

頭を抱いて、頬に触れて、口づけを求めれば、彼は貪欲に伸ばした舌で僕を満たす。

擦り切れるほど僕を擦りつけ、彼のペニスで快感を貪りながら、体で奪い合う確かな悦びに声を上げる。

：そろいえば、かつての“僕ら”も、好んで座位をしていた――

ふと蘇る記憶は、たちまち淫らな愛撫と声に搔き消されて、やがて僕は、デイヴィッドと昇りつめる快樂しか見えなくなつた。

白く、安らかな恍惚とうつつの狭間を、ふわふわと漂つていた。

背後から僕を抱く誰かが、僕の投げ出した腕をくすぐるような軽さでなぞつて、手に手を重ねた。

二度とはぐれない強さで、柔らかく、優しく僕を繋いでいるのは――

「……で、いぢいつど？」

後頭部に鼻を埋めた彼が「ウン」と答えて、我に返つた。  
「……いてくれて、うれしい」

彼は鼻でふふっと笑い、まだ熱を帯びる肌を僕に擦り

寄せた。

「…すゞく、しあわせ」

僕の手を握る手を握り返し、繫いだ手を胸に押し付けてみる。

後頭部で遊んでいた唇が「大丈夫?」と耳を食んだ。顔を向けると、目と鼻の先で、彼が幸せそうに微笑んでいる。

「も一回する?」と犬歯を見せた唇を避けて、もう一度、体を委ね直した。

幸せの一言にはとても込めきれない幸せを、伝えられたらいいのにと思う。

「…このままが、いい」

彼は「ウン」と同意して、僕に巻きつけた長い手脚に力を込める。

そして僕は、心地よい眠りに吸い込まれてしまう。

自覚めた時には、唇に近かつた。

「…やばい」

起きようとしても、デイヴィッドが絡みついて離してくれない。

「店の準備しなきゃ——」

「臨時休業でいいじやん、あなた、昨夜はタイチヨウフリョウだつたし」のんきな声を、憎みきれないのが悔しい。せめて、無責任な腕枕に非難を込めて噛み付いてやる。

「…君は、職場に連絡した?」

「したよ」

「いつ?」

「朝、あなたがコーヒー淹れてた時」

「…そう…そういえば君、僕のフラットが店の2階つてどうして——」

「確認してあつた」

ねえ、と僕の肩を囁んで、腹を撫で回した指を下腹部に滑らせる恋人は、抜け目がない男だ。

「…しないよ」

「わかつたから、ちょっとこつち向いて」

諦めて彼へ寝返りを打つと、デイヴィッドは思いがけなくシリアルスな顔をしていた。

「…聞いて、いい？」

躊躇う唇が歪んでいて、僕の前世のことだとわかつた。

「……いいよ、言つて」

「…過去のあなたにも、それまでの前世の記憶はあつた？」

「…たぶん、なかつた：僕が初めてだと思う——」

「じやあ、ますます確信が持てる」

「…？」

「あなたはもう、過去を繰り返すあなたじやない」

眩しい笑顔に吸い込まれて、ぶつかる額に我に返れば、すれすれの唇に焦らされている。

「もつと、僕に甘えて…」

抗えない、低く優しい囁き。

「あなたがめちゃくちや欲しい」

吐息は唇に塞がれて、「僕も」と答えた舌は彼の舌で溶ける。

体が慄くほどの痺れる快感は、僕の過去を乱暴に引き剥がしてくれる。

彼の腰を強く引き寄せて、僕に落ちる腰を腰で迎え入れて、もう離さないと口づけて、指先に込めながら、頭も体も壊れてしまいそうなほど繰り返した。

\* \* \*

結局、ペツドを出たのは14時になる手前だった。

「一緒にシャワー浴びよう」と甘える彼を、「バスルームで日が暮れる」と振りほどくと、彼は「そうなる」とニヤニヤしていた。

ちゃんと起床して風呂も済ませた僕らは、まず、昨夜のままの店内を片付けた。

デリはまだ食べられるものばかりだったが、僕は、外の空気を吸いたかった。

「カレーでも食べに行かない？」

僕の提案に、デイヴィッドは「もちろん」と笑い、「腹

「ペコ」と片付けを急いだ。

「それぞれの、記憶が出てきた時期」  
「うん

外に出ると、空には爽やかな水色が広がっていた。  
「せつかくだから、歩きでもいいかな？」

「全然、どこ？」

「あれって、その時あなたと僕が出会った時期じや  
ないかなって」

「メリルボーン・ハイ・ストリート」

「…そう、かも――」

「コンランショップがあるね」

「たぶん当たってる」

「そう、あのあたり、美味しいグリーン・カレーが食  
べられるパブがあるんだ」

「わかるの？」

「いいね」  
「僕じゃないけど、『僕』のことだからね」  
得意そうに目を見開く彼が、大好きだとと思う。

「…正直なところ、残りの98の記憶にも興味がある」  
「むごい死に様を知りたい？」

「冗談、やめとく、あなた、また泣いちやうから」

「…正直なところ、残りの98の記憶にも興味がある」  
「むごい死に様を知りたい？」

「地元民のルートだ」  
「…あなた前世の話は、あまりする気になれないん  
だけど…」

「…あなた前世の話は、あまりする気になれないん  
だけど…」

「きよろきよろと辺りを見回しながら、彼はさりげなく

僕に歩く速度を合わせた。

「怪しい、泣かれると正直キツい」  
「…もう泣かない」

「…あなたの前世の話は、あまりする気になれないん  
だけど…」

「…あなた前世の話は、あまりする気になれないん  
だけど…」

「何、いいよ、気になる」

園内の木々は青々とした葉を茂らせ、大小さまざま

ガーデンには春を謳歌する花々が咲き乱れている。

「うん」

「コーヒー奢つてあげる」

「自分で払うよ」と懐を探る彼を尻目に、オープン・

エアー・シアターの側のカフェスタンドに向かつた。

「君が律儀にくれたチップを使うからいいよ」

「律儀に分けてたんだ」

彼がニヤニヤしてるのがわかつたから、振り返らなかつた。

デイヴィッドを見ると、彼はどれかのバラか、もしくはどこか遠くを見ていた。  
何かを懷かしむように、愛おしむように細めた柔らかな目尻が、好きだった。

「…これから僕達は1000回だつて巡り逢つて、そのたびに10年後も20年後も、50年先だつて、こうして並んでバラを眺めてる」

「…うん」

コーヒーを手に、僕らは、ローズ・ガーデンに足を向けた。

彼は「わかるんだ」と微笑んで、コーヒーに口をつけた。  
僕は「信じるよ」と呟いて、コーヒーに口をつけた。

「…でも、さすがに50年は厳しい」

「健康第一だ」

クスリと笑つた彼は、突然「ねえ、昨日の話なんだけど」と朗らかな声を上げた。

僕を見つめる瞳は、日差しを浴びて透き通り、まるで子供のようにきらきらしていた。

「…マイケル」

5月の上旬。80種を越える色とりどりのバラが1万本、見頃のシーズンを迎える。その一輪一輪が我こそが最高だと言わんばかりに咲き誇る眺めは壯観だった。

特に示し合せもせずベンチに並んで掛けた僕らは、しばらくの間、バラやそれを愛でる子供連れのファミリーや観光客の姿を眺めていた。

「僕達のカフェの話」

「うん」

「ただの思いつきなんだけど…店の名前を、やっぱ変えない?」  
「なんて?」

「Hummingbird~Hummingbird Cafe~」

「Hummingbird (ハチューブ) ?」

「や、 Hummingbird」

「え? って?」

「かわいくない? ハチドリ」

「かわいい」

「かわいいし、明るい感じもして、イイと思う」

「うん、す、ハチドリ」

「決まりだ」とはしゃいだ彼は、長い脚を跳ね上げて

びょんとベンチを立つと、「早くカレー食べ行こう、

腹減りすぎ」と笑った。

「結構辛いよ」

「一番辛くしてもらお」

「マジで? やめといたほうがいい、僕はシーフード入りにする」

「何それ僕もそれにする」  
パークを抜けて大通りへと出た僕らは、余裕のある歩道を肩を寄せ合つて歩いた。

僕の胸は、ホバーするハチドリみたに浮足立つてい  
て、我ながら単純だと少し恥ずかしくなる。  
そして、彼を盗み見たつもりが、目をとく気づいた彼  
は「わかってる」と言いたげに笑つてみせた。

平日の夕暮れ。ハイ・ストリートには、ビジネスマン  
や仕事帰りの人々が忙しなく行き交つてゐる。他には  
ぽつぽつ観光客らしき顔が見えるだけで、仕事をサ  
ボつて遊んでいるのなんて、恐らく僕らしかいなかつ  
た。

「お店、どのへん?」

「こっち」

デイヴィッドの手を取つて、僕は、目当てのパブへと

向かつた。

かいせつ

(おわり)

露の宇宙侵攻がキツくて「戦争がない世界」を願つて書いたのでちょっと特別な一作です。BLに込めることが？感もありますが、自分なりの表現を考えた時にこれしかなく、この「戦争がない未来を信じるお話」ができました。

：ふたりの距離が少しずつ縮まつていくのがいいですね。このお話はスケベは重要じやないのではらつとですが、好きです。いざHする前、前夜失神もしてるとラウマ持ちのmさんに「平気？」って聞くdさんがイケメン過ぎて最高です、顔もいい、ハー最高しかない。

この先、末永く幸せに寄り添つて生きて、来世も1000年も20000年先も繰り返し巡り合つては戦争のない世界で添い遂げる。

そんな幸せなふたりの始まりを描き出したものです。

(2022年3月18日 pixivに公開)

アクアブルー

---

## ロンドンの金融街。

クラシカルな街並みに近代的なオフィスビルが生えるこここの東に、とりわけ異質な高層ビルがある。

住所から「30 St Mary Axe」と味気なく命名されたこの建物は、地面から突き出たミサイルのような形状で、きゅうりのピクルスに見立てて「ガーキン」の愛称で呼ばれている。40階建ての上から3フロアはレンタラントやパーだが、その下層は全てオフィス用で、テナントは国際的な保険や金融、法務関連、マーケティング会社などが占める。

建設当初、歴史ある景観を損ねると知識人達から猛反発を食らったこのビルも、今やロンドンのアイコンの一つに数えられる。それでも、他のビル同様、界隈の人間でなければ、この中に“何”があるのか、毛嫌いしていた人々ですらよく知らず、そして知りようもない。

そして今夜、僕は、このビルの知られざる一面を、知ることになる。

\* \* \*

僕のオフィスが入る特徴的ではないビルからガーキンまで、歩いて約10分。少し遠回りをして馴染みのパブで腹を満たし、22時を過ぎた頃、ガーキンのエントランスに足を踏み入れた。

聞いていた通り、レセプションの守衛に「Aqua Blue」と刻印された銀のカードを手渡すと、彼は機械的にそれと僕を4度交互に見た。そして、フロア奥のリフト（エレベーター）へと僕を導き、「34階へ」とだけ言つた彼を残してリフトのドアは閉じた。

20階には取引先があり、時折バーを利用するためそれなりに知つてゐるつもりでいたが、このリフトの存在は知らなかつた。

エントランスから隠すように設置された2台のリフトの片方の中で、22階のボタンを押してみるが、点灯しない。試しに10、30と押してみても、反応はない。34を押すとボタンが光り、低い音と共にリフトが上昇を

始める。面白半分に40から25まで押してみた所でリフトが停まり、僕はこの階専用のリフトを降りた。

34階は、一見すると5つ星ホテルのエントランスホールと変わらなかつた。ただ、それより幾分暗く、本来

は装飾目的の強いシャンデリアや洒落た間接照明に光源を任せている。広いホールには実用より装飾のためと思われるソファアとテーブルのセットが4組、間隔をあけて置かれていた。そして、僕の他に“利用者”の姿はない。

奥のレセプションに向かおうとすると、脇に控えていた男が僕の行く手を阻んだ。

暗くとも、使用人らしき彼のスーツは高価なビスポークで、その立ち振舞いは5つ星ホテルの使用人の比ではないほど駆けられていることがわかつた。

「失礼ですが——

「ああ、これを

銀のカードを差し出すと、彼はその画面と僕の顔を一

瞥した。そして「ようこそいらっしゃいました」と形だけの笑みを作り、僕をレセプション左の応接間に誘つた。

応接間では、支配人代理と名乗る中年の男に数枚の契約書を渡された。先の使用人以上によく駆けられた彼の目は鋭く、エレガントな装いにも関わらず軍人を思わせる。

書類には、ここルールが記載され、破れば最悪社会的に抹殺されるというようなことが書いてあるが、冗談ではないんだろう。

ざっと読み流し、最重要は「ここ的一切を口外しないこと」と理解して、承知のサインをした紙を支配人代理に返した。

「紹介状と、お名刺をいただいてもよろしいでしょうか？」

「ああ……」

僕をここ、会員制の高級デートクラブ「アクアブルー」

に導いた銀のカードと名刺を渡すと、支配人代理は代わりに黒いカードを差し出した。

その片面には何もなく、裏返すと「5826」と数字があつた。

「それでは、5826様、ご案内いたします」

支配人代理に促されて、応接間を出る。

彼についてホールの左中央の階段を昇ると、上階は高級ホテルのラグジュアリー・フロアの趣と変わらない。廊下には厚い絨毯が敷かれ、ドアとドアの間隔が広い。

そしてどの部屋からも小さな物音一つ聞こえず、静かなものだつた。

「こちらでございます」

真奥のルーム・ナンバー000のドア前で、支配人代理が振り返つた。

「先程お渡しした会員証がキーになります」

「そう」

「くれぐれも紛失などなさいませんよう」

丁寧な聲音の裏に、厳かな威圧がある。

契約書に、キーの紛失は即会員権剥奪だと書いてあつたのを思い出し、ここはまるで軍隊か情報機関か、はたまたギャングの城だな、と思う。

「わかつた」

「飲食のオーダーや、何かございましたら、遠慮なくフロントまでお申し付けください」

「ありがとうございます、じやあ早速、あるならジャパンのウイスキーが欲しい、なければスコッチのいい物を適当にチョイスしてくれ

「かしこまりました」

支配人代理は懇懃に礼をすると、きびきびと廊下を去つていった。僕から外れた彼の目は、最後まで僕を冷たく品定めしていた。

\* \* \*

ルーム・ナンバー000は、高級ホテルのラグジュアリーなスイートそのものだつた。部屋は南向きらしく、

視線の先の壁一面のはめ殺しの窓から、闇に浮かぶタワー・ブリッジとテムズ対岸のきらびやかな夜景が見えた。

リビングに踏み込むと、そこには既に、僕を待つ一人の男娼がいた。

「こんばんは、ご新規さん」

ソファから飛び跳ねるように立ち上がり、くるりとこちらを振り返った男の“なり”に、意表を突かれた。

「あ、ああ……」

あっけにとられているうちに男は躊躇なく僕に歩み寄り、僕の首に腕を回してしなだれた。

「まずは一緒に風呂に入る？いきなりファックでも構わないけど、ああ、僕は食事は済ませてあるから平気だ、そこらへん気は使わないで」

黒いアイラインで囲んだ目が笑い、僕を嬉しそうに見上げていた。

よくよく見れば、黒いアイシャドウで塗りつぶしたアホールは、くつきりとした二重まぶただつた。恐ら

く黒く染めた髪は無造作にスタイリングされ、両耳にいくつかのボディピアス、ライダースに白シャツ、ダメージドの黒いスキニーにマーチンのブーツを履いている。

パンクかゴス系“かぶれ”らしいことは一目瞭然だが、白目も瞳も大きな目元が際立つ童顔と、よい肌艶のせいで年齢が全く読めず、「年甲斐もなくこんな格好」とも思いきれない。

そして見れば見るほど、何もかも「男娼」のイメージから遠くかけ離れている気がして、なんだか騙されたような気にすらなつた。

「…そうだな、まず、君の名前を知りたい」

手持ち無沙汰な腕を、とりあえず男の腰に回してみる。タバコと、しつとりとした甘いウッディのフレグランス（上質な物であることはわかる）が控えめに匂つたが、意外にもドラッグは臭わない。実際、その出で立ちにありがちな不潔さやだらしなさは微塵も見て取れず、その好ましさが輪をかけて「男娼」感を薄めていた。

「僕はルシフナー」

「本名?」

「まさか、アナタは?」

「デイヴィッド——」

「別に本名は言わなくていい」

ルシフナーが、ウインクをした。

「本名だとは——」

「わかるよ」

「別に、本名を隠す必要はない」

「そう」

彼は笑みを深めると、僕の股間をそつと手のひらでさ

すつた。

「……じゃ、フェラする?」

にこ、と笑つた歯列は作り物のように綺麗だが、その

白さはぐく自然なものだ。

「フェラは挨拶代わり?」

「誰だつて好きだ」

につと口角を上げ、べろりと伸ばした舌には、ボディ

ピアスの丸いキヤツチが見えた。

「……まだそんな気分じゃない、酒でも飲んでからにしない?」

「頼む?」

「頼んだ」

その時、チャイムが鳴り、ルシフナーはするりと僕から離れてルームサービスを出迎えた。そして、サービングカートを押してリビングに戻つた彼は、「ヤマザキの25年だ、ヤバいな」とボトルを掲げた。

「そんないい酒が出てくると思わなかつた」

思わず吹き出した僕に、ルシフナーは「歓迎されてる」とウインクをした。

「懐を測られる」

「これはフェラしてた場合じゃないね」

彼は高い鼻筋にシワを寄せて笑い、「出会いに乾杯だ

とテーブルにグラスの用意を始めた。

ルシフナーは当たり前のようにストレートとチエイ

サーをそれぞれ2つ作つた。そしてソファの僕の側に掛け、酒のグラスをくれた。

目を奪われるほどの手際のよさに、確かにプロなんだなと感心したが、口には出さずに目で謝意を伝えた。

「乾杯」「乾杯」

グラスを嗅ぎながら彼は僕を上目で伺い、静かに酒を舐めた。そして、口に含んだそれをしばらく味わい、喉に流した後で「繊細な味だ」と溜息をついた。

僕も同じよう口に酒を嗅ぎ、稀少な酒を味わつた。力力オのようなビターさとフルーツの甘みが複雑に絡み合ふ風味は、フレッシュな芳醇さが独特だつた。

「ああ、うまいな…」

「改めて、ようこそアクアブルーへ、初めてのキヤストが僕つて、アナタはかなりツイてる」

チエイサーの水に口をつけながら、ルシファーはワインクをした。

息を吐くようにウインクをするんだな、と無邪気な笑みを眺めながら思う。

「そうか、それで…何をしてる人？」  
「売り」

「…気を悪くしないでほしい、正直驚いた——」「僕が、『らしくない』って？」

「そう」

彼はニヤリと笑い、ドライマンゴーを齧つた。

「よく言われるから気にしない、まあ実際、僕みたいなタイプは少数派だ、他はほとんどがモデルか俳優をしてる、たまにスポーツ系もいるけど…つまり、男臭いのから美少年まで選り取り見取りだよ」

「…君は、いくつ?」

「それって重要?アナタは?」

「36」

「そう、じゃ、そのちょっと上」

グラスに口をつけた横顔から朗らかさが失せ、途端に大人特有の余裕と氣怠さを纏まよい始める。

さめた目元を盗み見ながら、まるでカメレオンだとと思う。

「じゃなくて、本業」

僕の問いに、ルシファーはうんざりと眉をひそめて、ドライフルーツの皿をこちらに勧めた。

「デイヴィッド、一つ言つとく。キャストのプライヴエートは詮索するべきじゃない、まあ答えるけど、僕も他のヤツらも、特に個人的な話は嘘つぱちだと思つたほうがいい。」

「わかつた——」

「僕は、売れない歌手」

「卖れないGREEN DAY？」

彼はじろりと僕を睨むと、言葉を続けた。

「心配しないで、ココじや僕は超一流、これまで“サビス”の質でクレームを受けたことは一度もないし、僕の客は9割リピートする。つまり僕は、これでもこの英國でトップクラスの男娼だ。」

どう？と軽く眉を上げ、酒を舐める彼に、それを誇るような意図は見えない。

「お喋りも得意？」

「好きだけ、とにかく、僕はエンターテイナーだ」

彼は大きな目を見開くと、大げさにツンと鼻を上げた。

「…とにかく、わかつた、認識を改める」

「今夜僕を味わつてみて、不満なら次はちゃんと希望のタイプを伝えれば、もう僕と会うこともない、シンブルだ」

そう言つてまた、ルシファーはウインクをした。

アクアブルーのシステムは、完全予約制だ。事前に電話をし、希望のキャストと日時を取り決める。今日、つまり全く初回の予約時に、「タイプに特に希望はなく、空いている男なら誰でもいい」とだけ伝えていた。高級クラブなら、そういうハズレを引くことはないと思っていたが、その結果、あてがわれたのがこの彼だった。

「希望のタイプ：特になかった」

「ない？」

咥えたタバコにジッポーで火をつけながら、彼はおかしそうに僕を見た。

「禁煙だろ?」（※英国は屋内全面禁煙）

「ここは治外法権、吸う?」

「じゃ、遠慮なく」

彼のシガーケースから一本もらうと、ルシファーは咥

えタバコを突き出した。

その火種で火をつけながら、ごく間近で彼を覗いた。

伏せた目のまつ毛は長く、深い緑がかつた灰青の瞳は、

ただ、綺麗だと思った。鼻は高く、つんと上向いた鼻

先は頑固そうに見える。形のよい薄い唇は上品なほど

で、とても、男のモノにしゃぶりつきたいように見

えない。

そして伏し目になると、幼い容貌が危うい色気を帶び

て、確かな美人だと思った。そして恐らく、ただでさ

え目立つ目を強調するアイメイクは、整った顔立ちの

バランスを崩すからしないほうがいいと思うが黙つて

いた。

「…それで、君は、ゲイ?」

ルシファーは、フンと鼻で笑つた。

「僕にそんなに興味が?」

「まあ——」

「バイ、って言つとく、ココじや受け専、稼げるからね」

「そうか」

「じゃあ、聞くまでもないけど、アナタ…もうきみで

いい?きみはゲイ?」

退屈そうな問い合わせ、煙と吐き出された。

タバコを挟む指と手首を、ごてごてと安物でないシルバーのアクセサリーが飾つていた。脱いだらタトゥーの一つや二つくらい、もしかしたら全身を埋めている

んだろうとぼんやり思う。

「違う……わからない、そんな自覚はない」

僕の返答に、彼は不審者を見るような顔をした。

「男を希望しといて?」

「なんとなく、女を選ぶよりいいと思つて——」

「どうして?」

「妻が死んだばつかだ」

ルシファーはさりげなく顔を背け、さっぱり「お悔や

みを」と小さく煙を吐いた。

僕も「どうも」とふかした煙で返した。

「…いつ？」

「先々週、葬儀が一昨日——」

「ココには、奥サンを忘れに？」

「…別に、葬儀の後の茶会で、ここ紹介状をもらつ

たから来てみただけ」

「なるほど」

ルシフナーは、ハハッと愉快に笑つた。

「？」

「きみ、全然悲しそうじやないからさ、かえつて信頼

できる」

「どうかな…」

「紹介したソイツなりの慰めなんだろうね」

「彼の意図は知らない」

「取引相手の重役つてトコだろ？『『楽しめ』、今後と

も『よろしく』、つてことだよ」

「？」

「ココは信頼第一だ、揺るぎない地位と確かな懷があつて、そなう簡単に口を割らないと認められたヤツしか来れない、特權階級に昇進おめでとう」

タバコを灰皿でもみ消す横顔は、なぜかとても綺麗に見えた。

「…そうか」

「ペナルティはわかつてゐね？」

「さつきサインした」

「オーケイ、じゃ、そろそろココのシステムとルール

の説明をしよう」

ルシフナーはぐいと酒を飲み干して、「初回はこれが

面倒」とボヤいた。

「ココはどうして、アクアブルーっていうの？」

「そんなこと気になる？意味はない、きみの名前も僕

の源氏名も、ココじゃ記号に過ぎない」

「そうか」

「」

そして彼は「こつからは嘘はない」と真顔で水を飲む

と、こちらにまつすぐ体を向けた。

「朝まで一晩、基本40万、後はプレイの内容で加算されたく。例えば、キス1回で1万、ディープキス1回で3万、フェラの1抜きで25万、それにかけた時間分を加算する、こんな感じ。基本以外は歩合になるから、キヤストは頑張る。」

「全部数えるの？」

「もちろん、でも実際の会計はどんぶり勘定。一回

ファックしたら、500万くらいだと思つてくれればいい。きみが蛋白ならもう少し少ないかもしれないし、キヤストの機嫌が悪ければトータルに倍掛けするかもしれないし、僕はする。」

そう言つて、彼は悪気なく笑つた。

「…つまり、全部キヤストの気分次第？」

「そう、天井はない、女のトップモデルなんかは、一

晩で2000万請求するのもいる…まあ心配しないで、よっぽどじやなきや非現実的な金額を請求したりしないよ、たぶんね」

「問題は？」

「お互ひにない、まず、ココの客は明細を気にするような連中じゃない、なぜならキヤストは客の望みになんでも応えるから――」

「なんでも？」

「ルシファーはくすりと笑い、僅かに目を細めた。

「例えれば一晩中足の指を舐めろつて言われたら喜んでする…例としてはかわいすぎるけど――」「君の、取り方は？」

「きみは知らなくていい、けど、良心的とだけ言つとく、じやなきや売りして生きてない。それに関連して、キヤストへのチップは禁止。」「どうして？」

「ココがピンハネできない

「チップはそういうものだ」

「その分勝手に会計に乗せるから気にしないで。それから、連絡先の交換、ココ以外での接触・交際も禁止。」

そういう行為は、いずれ個人的な交際に発展する。」

「それはまずい？」

「もちろん、ここはマッチメーリングする所じゃない、あくまでも性的サービスを提供するだけだ、太客が現れるたびにキヤストがいなくなつたら困る」

「…方が一、それでもそういう関係になつたら？」

「キヤストはだいたい辞める、それは自由」

「買い上げみたいなルールはない？」

「身請け？、ない。キヤストはあくまでも個人事業だから。で、そういう場合、相手の客は退会もしないでココに通い続けるヤツがほとんどだ、業が深いよね。」

「そうか」

ルシファーは一息つくと、新しいタバコをふかして続けた。

「じやあ禁止行為。契約書にもあつたと思うけど、ド

ラッグの持ち込みは禁止、理由は勝手にオーバードーズで死なれちゃ困るし、キヤストも危険に晒される。ドラッグが欲しければココが提供する、ただし、基本

的にオーバードーズしない量までだ。同じ理由でおも

ちゃも持ち込み禁止、何が起こるかわからない。だからココで用意されてるものを使え、マニアックなやつから最新の物までなんもある。つまり手ぶらで来いだ、むしろ親切だろ？」

「ああ、ドラッグの種類は？」

「シャブ以外はある、精力剤やバイアグラなんかも。あと、一切の録音、撮影も禁止、理由はいちいち言わなくてもわかるね？セルファイーで2ショウなんてもつてのほか。」

「うん

「他には、むしろこれが最重要、キヤストの体を故意に傷つけるプレイ、プレイでも絶対だめだ。後はうつかり死ぬプレイ、首絞めとかね。」

「そんなことしない——」

「と思うだろ？それがしたがるヤツは結構いるから言つてる。で、SMとかの専門的なプレイは専門のキヤストがいて、それ用の部屋もあるから、予約時に希望

を伝えればちゃんと遊べる。まあソフトなSMなら通常キヤストでも大丈夫、僕もソフトなやつなら全然平気だし、ここにも多少の拘束具なら常備してる、鞭や蠍燭はないけどね。こちらへんのプレイの境目がわからなければ、予約時に具体的な希望内容を言えばその通りにセッティングされるから、そうして。命に関わらなければ、どんな変態的なモノでも構わない：当たり前だけど、獣姦以外で。」

ルシファーは「ヴウ」と唸つて歯を剥くと、突き出した舌でべろべろと宙を舐めた。

「結構厳格なんだ」

「その代わり、お互に限りなく守られる、きみに守秘義務があるように、キヤストにも課せられる、リークでもすれば最悪消される」

彼はおどけて、タバコを挟んだ指をこめかみに当てるジエスチャーをした。

「：方が一、死んだら？ 腹上死とかあるだろ？」

「客なら穩便な死因で自宅に帰り、キヤストなら適當

に処分される、世間を騒がせることはないけど、そのリスクと手間となるべくかけたくない」

「理解できる」

「一番大切なこと。キヤストは奴隸じやない、嫌がるプレイを強要しないこと、場合によつては即バーンされるから、よく覚えておいて。概ねどのキヤストもNG行為があるから、プレイ前にちゃんと確認しておくといい。」

「君のNGは？」

「喉を掘るイラマチオ、したければ他のキヤストを選んで」

「わかつた」

「だいたいこんな感じだ、何か質問は？」

タバコを揉み消したルシファーは、チエイサー用の水のボトルをダイレクトに半分ほど飲み干した。

「ないよ」と答えると、彼は満足気に笑い、ふうと肩の力を抜いた。

今の今まで、まるで他人事のようにペラペラとお決ま

りを述べていたのに、ふいに気を緩めたその笑みの柔らかさに、思わず目を奪わっていた。

新规の僕を迎えた彼は、まるでピエロに見えていた。

それが、言葉を交わせばくるくると色を変え、時に別人のような顔になり、愛くるしく笑つたかと思えば呆れたり、疎んだり、ふざけたと思えば虚ろな目をしたり、かと思えば熱っぽい目で僕を誘つては、気のない顔でそつぱを向く。記憶に留める間もなく、どれもが僕く移ろつて、本当の顔がよくわからない。

単なる好奇心でも「素の君を知りたい」と言うのは、ココでは“違う”んだろうと思ったところで、いつの間にか彼に引き込まれていたことに気がついて、さすがプロだな、と感心していた。

そして、僕の視線に気づいたルシファーは、「じゃ、次はハーフロックにする？」と酒のボトルを指して笑つた。

「…君、よく喋るね——」

「これも仕事だ、初回レクで1万」

「キスと同じだ」「…したい？」

囁く口元が、気づけば目と鼻の先にあつた。

白い肌に映える唇の赤さに、目を奪われる。視界の端で、彼がジャケットを脱ぐのが見えた。

「わからない…」

口紅は、塗つていなかつたはず。

その唇に伸ばした手に、彼の指が蛇のように絡みつく。「ココに、何しに来たの…？」

ルシファーの唇が、そつと指先をくすぐつた。温かく滑らかな感触に、首筋がぞくりとする。

「わからない…」

「キスは危険だ、おすすめしない…」

クスクスと笑う吐息が、僕の唇を掠めた。

妖しく揺れる瞳は、夜の泉のように底が見えない。

「…そう」

ほんの少し屈むだけで、その唇は捕まつた。潜めたはずの溜息が、唇の隙で混じり合う。

『どうしたい?』と問う唇が、僕を優しく滑る。

『わからない』と答えた舌で、彼の吐息を嗅いだ。

重ねただけの唇を開くと、待ち構えていた舌が僕に滑り込んだ。

そして僕は、ルシファーの体に腕を回し、抱き寄せながらソファに背を倒した。

僕に馬乗りで屈み、口を啜りながら、ルシファーは腰を揺らしていた。

僕を探る舌は彼自身を教え、僕の股間を擦る腰は、ゆつたりと僕の昂りを待っている。

柔らかな舌の愛撫の中で、硬いピアスが彼を主張していた。

僅かな反応も見逃さず、的確に、丁寧に吸い取られる心地よさに、濡れた意識がふやけていく。ビターな唾液に喉が痺れ、息が上がる。

夢中で彼の頭を抱くと、ルシファーは喉で笑い、腰を強く擦つて応えた。

ピアスが歯にかちりと当たり、その舌を強く舐れば、彼は甘い吐息を僕に注いだ。

引っ込んだ舌を追つて、誘き寄せられるまま彼の隅々を舐め回す。噛んだピアスを引つ張れば、喰み直した唇の中で何度も舌を絡めあえた。

「ああ…」

ふいにルシファーが頸を上げ、我也忘れて繋げていた舌がほどけて離れた。

見上げた唇の端から、こぼれた唾液が頸へと伝い落ちる。

「きもちい…?」

僕を伺う目は、蕩けたように潤んでいる。ハアと肩で喘ぐ素振りも、まるで、本当に昂ぶつているようになえた。

「すごく、気持ちよかつた…」

正直に答えながら、彼の嘘と本当など、考えても意味がないと思つた。

「よかつた」

本当に、幸せそうに笑う歯列が、眩しい。指を伸ばして、頬に伝う唾液を拭いながら唇へ辿つてみる。

彼は口を開け、僕の指にぬるい吐息をかけながら舌を這わせた。

「君は、すごくキスがうまい」

なんて、褒めるのも野暮だろうと思つても、言うべきだと思つた。

ルシファーは本当に嬉しそうに笑い、僕に擦りつける腰を強めた。タイトなデニムの下で、既に彼はエレクトしているのがわかる。

「キスも、好きなんだけ？」

「お喋りと同じ？」

「きみのキスは、乱暴だね」

「ごめん——」

「好きだよ、いいんだ：ココでは、好きなことを好きなようしていい」

「…そう」

「きみは顔がいいから、気分がイイ」

うつとりと笑い、くねらせた腰を押し付けるその様は、正しく男娼だった。

「ファックも好き？」

「したくなつた？」

「…わからない、けど、疼いた」

僕を伺う腰に手を回すと、シャツ越しにも肌は熱い。

「しゃぶる？」

彼はわざとらしく息を荒げ、僕の中指と薬指を舌をぬらぬらと巻きつけた。

「しゃぶりたい？」

「言つて…」

ひつそりと喘ぎながら、囁く声は甘く、強く、淫らな

欲求を強引に焚きつけられる。

「しゃぶつて——」

「キツく」

「しゃぶれ」

「喜んで…」

ルシファーは悪魔のような顔で笑い、見せつけるよう

に唇をぐるりと舐め回すと、僕の下腹部にゅつくり這い下りた。

ルシファーのフェラは、言うまでもなく上手かつた。

彼の唇に吸い込まれた僕の半勃ちのモノは、その舌が5度サオを擦る前に完全に勃起した。

キスとは比べ物にならない、甘く優しい愛撫に、僕は喘いだ。生き物みたいな舌が纏わりついて、イイ所をたちまちに暴き出される。僕を知り尽くしたような粘膜と、ごつごつ擦れる金属に翻弄されて、キスとこれだけで丸裸にされた気になる。

見下ろせば、彼は、幸せでたまらない、そんな顔で僕を見つめながら、熱心に僕を愛でていた。  
これが、愛されるということなのか？まるで本当のような錯覚に、戸惑つた。それでも体は素直に悦んで、始めて3分もしないうちにこらえきれなくなる。

たまらず彼の髪に触れると、指をじつとりとした熱があつた。

下卑た笑みを深めたルシファーが、大きく頭を上下する。握り込んだ根本を強くしげき、絡める舌を早めながら、僕を腹の底から絞り上げる。

「ツ……！」

そして僕は、恍惚に濡れた瞳に見据えられながら、あつけなく達した。

快感に痺れた頭で、ルシファー眺めていた。ペニスを押し揉まれる圧を感じて見ると、彼の喉が上下していた。美酒を煽るように、実際、先程の酒を飲んだ時以上にうまそうに精液を飲んだ彼は、僕を咥えたまま嬉しそうに笑っている。そしてしばらく、舌で転がしたりくすぐつたりと気ままにいじくつた後で、縮み始めたモノを強く吸うと、ちゅつと音を立てて口から僕を抜いた。

「…よかつた？」

くたびれたサオを舌でちろちろと突つく彼は、子供みたいに楽しそうにしている。

「ヤバかつた――」

「嬉しい」

彼はぱくりと亀頭を咥え、もう一度強く吸つて喉を鳴らした。どうやら、残滓が気になるらしい。

「凄かつた、全然歯が当たらないし」

「フェラには自信がある」

アイスバーでも食いつくようにペニスで遊んでいた唇

が、イノセントに笑う。

「舌が意味わからない動きしてた…」

「ふふ」

「こんなにヨかつたの、初めてだ…」

彼は満足気に微笑むと、すっかり縮んだ僕に啄むよう

な口づけをくれた。

「男のカラダは男のほうがよくわかつてる、だから同

性の愛撫のほうが気持ちいい、これは僕の自論」

「フェラも好き？」

「別に」

自信があるとニヤニヤしていた彼は、途端につまらな

そうな顔をした。

「自分がこうされたら嬉しい、気持ちいい、つてことをしてるだけ」

「プロフェッショナルだね…」

「見直した？」

「別に疑つてたわけじゃないけど、見直した――」

「どーも」

「そんなに精液がうまいのかつて、驚いた――」

「まさか、オモイヤリ、みたいなもん？」

「…」

「きみはあんまり臭わないし、顔がいいから、気合も

入るよ」

「つていうか、新規の客にそういう…ホンネみたいな

ことバラして平氣？」

「きみだから言つてる」

そう言つてルシファーは、何か意味深な目で僕を見つ

めたが、その意味はわからない。ほんの一瞬の、どこ

か遠くを眺めるような力のない目元は、どんなエロ

ティックな表情より色っぽく見えた。

そして彼はまた、艶っぽい顔を作ると、猫みたいにしなやかに僕の体を這い上がった。

「…そろそろ、ファックしたくなつた？」

胸を這う指がシャツのボタンを外し、ペニスから外れた指が陰嚢をすくい、裏側をペチペチとノックする。

「…アナルで？」

「あいにく、他にアナはない」

彼は、可愛らしく首をすくめた。

「したこと、ない」

「奥サンとは？」

「しなかつた」

「遊びでも？」

「ないよ」

「…そお、いたつてノーマルなんだ」

「…わからない——」

「試してみる？」

何度もかわらないウインクをした彼に、首を振った。

「…いや、いい」

興味はなくはなかつた。が、イッたばかりなのと、キスとフェラを知つただけでも、十分満足できたよう気がしていた。

「たくさん射たから、溜まつてるとと思つてた」

思いがけず、ルシファーはけろりとした顔で起き上がり、邪魔な僕を押しのけてソファに掛け直すと、酒のグラスに手を伸ばした。

フェラの間に開けていたのか、股間のジッパーから、勃つたモノが豹柄の下着を突き上げてその形を覗かせている。

ペニスをしまい、スラックスを履き直して、僕も体を起こした。

「別に、君が、嫌とかじやない——」

「わかつてる、気にしてない」

ルシファーは咥えたタバコに火をつけると、グラスに水と酒を入れ、マドラーで丁寧にかき混ぜた後で、きつちりと酒と同量の水を入れて、またよく混ぜた。

その、ときぱきと酒を作る涼しい横顔に、見惚れてしまふ。彼がいるバーなら通つてもいいとほんやり思つていると、「ン」とグラスが渡された。

酒を舐めて頬を緩めた彼は、聞き逃してしまいそうなほど小さな溜息をついて、背もたれに深くもたれた。そして僕は、程よく回つていた酔いのせいか、恍惚の余韻か、ふわふわと緩む頭で、ただ、話したいと思つたことを口にした。

「…妻とは、理想を絵に描いたような生活をしてた」

「へえ」

彼は、どうでもいいと煙を吐くと、涼しいままの横顔で酒を啜つた。

「妻が死んでも、何も感じなかつた」

「…」

「悲しみも、喪失感もない」

「…」

「…彼女を愛してたのか、わからない——」

「きみは、わからないことだらけだ」

呆れて笑い飛ばされても不快じやないのは、事実だからだろう。

「ココで女を避けたし、まだ指輪してる、なんだかんだ愛してたんだろう——」

「指輪は、まだ籍が入つてるからしてる」

「……」

「…ただ、もつと、思いやれたと思う」

「…」

「思いやる、べきだつた——」

「そういうのは、義務でするモンじゃないんじやない？」

ルシファーは、ブーツの足をガンとテーブルに乗せた。そして、「たぶんね」と呟くと、深く吸つたタバコの煙を大きな溜息と吐き出した。

しんと部屋が静まり返り、楽しい話題じやなかつたなと反省したが、振り返つても、楽しいとラベルを貼れる話題はない。

無意識に溜息をついていた僕に、彼は黙つてシガー

ケースを差し出した。

「ありが——」

「いいよ」

「……フアック、しようか——」

「僕に気なんか使わなくていいし、それにもう、萎えた」

彼は「ホラ」と縮んだ股間を掴むと、わしわし揉んで

みせた。

「……僕は厄介な客?」

「全然、むしろ楽で助かる」

「……」

「唯一残念なのは、リピートがないこと」

「君に不満はない——」

「そうじやなくて、きみは、ココに来る必要がない

「……」

「彼は、「だろ?」と微笑むと、ぐいと顎を上げて酒を煽つ

た。

その、何も期待していない、冷たく憐れむような笑み

も、綺麗だと思った。

そして彼は、手首や指のアクセサリーを外しながら、そつなくベッドルームへ行つてしまつた。

「じゃ、おやすみ」

そしてルシファーは「寝よう、添い寝も任せてよ」と腰を上げ、チエストからシルクのナイトガウンを二つ取り出し、片方を僕に放つた。パープルのそれは、いかにもだなと、思わず苦笑いが漏れる。

その場で服を脱ぎ、着替え始めた彼を、タバコを燻らせながら眺めていた。

豹柄のブーメランパンツだけになつたその体は思つた以上に筋肉質で、見るからに健康的だつた。肉は程よく締まつているが、ゴツすぎないメリハリが柔らかな輪郭を描いている。腰は男らしい太さがあるが、ヒップの位置は高く、女性のように丸い。見る限り、体毛のない体は、清潔感を感じる以上に扇情的に見えてしまうのは、彼が男娼だからだろうか。そして意外にも、見える範囲にタトゥーはなく、背に何かの絵柄がちらりと見えただけだつた。

アカアブルー

ほんの先程までの熱っぽさが、嘘みたいにつれないと少し寂しさを覚えた。本当に、どうしてココにいるんだろうと気付かされたバカバカしさと虚しさを、アルコールで麻痺させるためにグラスの残りを煽つた。

着替えて寝室に行くと、ルシファーはキングサイズのベッドのど真ん中に寝転がり、スマホを覗いていた。

「…横、いい？」

寝台の側で伺うと、彼はスマホを放り出し、まるで待つてましたとばかりにニコニコと僕に手を差し出した。

手を引かれるまま横に寝転がると、ルシファーは僕にぴったり体を擦り寄せた。

「スマホ、見てていいよ——」

「お客様サン」といる時は、ちゃんと向き合のがルールだ

「ココはきつちりしてることね」

「これは僕のルール」

「…君は、すごいな」

「理想の恋人として、サイコーの時間を提供する、それが僕の仕事」

ルシファーは体を起こすと、サイドテーブルから酒のグラスを取つた。

まだ、寝る気はないらしい。

「…君の体、すごく健康的だ」

彼に体を向けると、ヘッドボードにもたれた彼は、僕に楽しそうな一瞥をくれた。

「いきなり何？興味ある？」

「…まあ——」

「体が資本だからね、ちゃんと食べるし、できる限りトレーニングもしてる」

「ちょっと驚いた」

「何が？」

「ロッカー？って、細いのがクールなのかと思つてた」

「メタル方面はそうでもないし、それに僕はロッカーだなんて一言も言つてない」

「グラスをあてた口元が、静かにほころんだ。」

「…それに、脱いだら全身タトゥーだらけだと思つて

た」

「…“らしくない”？」

「男娼らしくも、パンクでもゴス系らしくもない」

「パンクともゴスとも言つてない」

「じゃあ何？」

「秘密」

含み笑いを浮かべた横顔はなんだか穏やかで、眺めて  
いるだけで先程の侘しさのようなものを簡単に忘れら  
れた。

「…背中には、タトゥーある？」

「見えただろ？」

「よく見えなかつた」

「…興味ある？」

「見て、みたい」

「じや、脱がしてよ」

ルシフナーはあつけらかんと笑い、グラスをサイド  
テーブルに戻した。

起き上がり、彼に向き合つた。

本当ならば、このままキスをするのが順当だろうと思  
いながら、黙つて彼のウエストのベルトを解いた。

静かにフロントをはだけると、薄暗い室内でも白い胸  
と腹はいやに眩しい。

そのつもりはないのに、否が応でも小麦色の乳首に目  
を奪われてしまうのは、彼が男娼だからだと思う。

「…毛が、ないね」

「処理してる、“らしい”、だろ？」

「かも……」

「喜ばれるし、きもちいんだよ、男の体毛が肌に擦れ  
るの」

「下も？」

「もちろんパイパン」

「…そか——」

「別に、珍しくもない」

きわどい上目遣いから目をそらして、肩から後ろへガ  
ウンを落とした。微かな衣擦れを立てて、ガウンが腕

を滑り落ちた。

露わになつた肩は極端な撫で肩で、鳥が留まつたら滑り落ちそだと思つたら、なんだか少し笑つてしまつた。

「何?」

「撫で肩だなつて」

「悪い?」

「鳥が留まつたら滑り落ちそだ」

「初めて言われた」

「…鳥になりたい」

彼がぷつと吹き出し、肩が揺れる。

その撫で肩に唇を寄せると、ルシファーはするりと僕をかわしながらガウンを脱ぎ捨て、うつ伏せに横たわつた。

ビーチで日光浴でもするよう組んだ腕の上に頬を置いて、流し目をくれる彼は、本当に自然に、恋人同士のじやれ合いを楽しんでいるようだつた。

「どーぞ」

その背には、翼があつた。胸の裏あたりに付け根があり、肩まで伸びて折り畳まれた翼は背筋を下り、一番長い風切羽の先が腰と尻の境目に流れている。

「白い、翼?」

ほとんどが線のみで、陰の部分にしか塗りが彫られていないその絵柄は、そう見えた。

「…そう、そのつもり」

「天使、みたいだ――」

「そんなつもりじゃない」

クスクスと上下に揺れる翼は、今にも大きく開いて羽ばたきそうに見えた。

「じゃあ何?」

「色を入れたくなくて、白い翼つてことにしてるだけ」「どうして?」

「僕の背中、キレイだから、タトゥーで塗りつぶしたから、他の所にも彫らない」

「だから、他の所にも彫らない?」

「どう、背中だけじゃない、僕は僕のありのままの体

が好きだ」

「…そう」

「ヒップ見てよ、すごく形がいい、自慢だ」

あえて見ないようにしていた尻をもぞもぞと揺らされ  
て、目をやらずにはいられない。

締まつた尻も間近で見れば異様に綺麗で、挑発的に僕  
をそそる下着から目をそらした。

「…なんで、あえて翼を？」

「僕は、鳥みたいに自由、つてこと」

「…ああ」

「？」

「型にハマらない、君らしい」

「型にハマらない、それだ」

「…触つても、いい？」

「特別に許すよ」

指先でタトゥーのラインをなぞつてみると、墨を入れ

た部分がほんの少しだけ盛り上がっていた。右翼の付け根にそつと頬を乗せてみると、すべすべとした温も

りが気持ちいい。そして、日だまりの枯れ草のような、  
懐かしいような、不思議な体臭がする。少しすつとす  
るその香りは、どこか、生物的ではない気がした。  
「…君は、天使みたいだ——」

「冗談、ウケる」

頬がじんと震えて、彼が笑つたのがわかつた。  
「…墮ちてるフリをしてる、天使——」

「しつこい」

左翼にあてがつた手を流れに沿つて滑らせると、密や  
かな溜息が聞こえた。

「取りたくない」

「…メイク、取らないの？」

「…ないほうが、いいと思う——」

「余計なお世話」

「取つたら、もつと天使だ——」

「うるさいな」

両翼の付け根の間に唇を押し付けてみると、その体に  
少しだけ緊張が走つた。

言いたいことを言つて満足した僕は、ただこうして触

れているだけで、温かいもので満たされていくような

気がした。

ルシフナーは、背中に張り付いた僕に、黙つて好きな

ようにさせてくれた。

囁くような吐息を聞きながら、僕は、寝落ちてしまう

ままでつと、柔らかな翼に触れていた。

\* \* \*

翌朝。目を覚ますと、ベッドに一人だつた。時計を見

ると、のんびりはしていられない時間だつた。馴染み  
のない部屋なのに、随分深く眠れた氣がするのは、酒  
だけのせいではないと思う。

リビングでは、ルシフナーが朝食を食べていた。

テレビは意外にも国営放送のニュースがついていて、  
テーブルには豪勢なブレックファストがずらりと並ん  
でいる。朝食は、僕の分もあるらしかつた。

「おはよ、先食べてた」

新聞から顔を上げた彼は、ぱくりとパイナップルを頬  
張つた。既に風呂を済ませたらしい黒いバスローブ姿  
の顔は、きちんとメイクされていた。

「食べなよ、朝メシもちゃんとルームサービスがある  
んだ、そこらのホテルよりイイよ」

「あんま時間ないんだ、風呂入つてくる」

「そ」

鼻歌まじりにトーストにジャムを塗る彼を見ている  
と、ココがデートクラブで、彼が男娼であることが、  
なんだか嘘みたいに思えた。

風呂と身支度を済ませ、テーブルの朝食からスマーケ  
サー・モンとマッシュルームを立つたままつまんだ。

そして、部屋を出ようとすると、ルシフナーにのんび  
り呼び止められた。

「もう行くの？」

「うん、昼から外せない会食があつて…」

腕時計から顔を上げると、ルシファードは目の前に立つて僕を見上げていた。

「ネクタイは？」

彼は、まるで世のワifがそうするように、僕のジャケットの埃を払い、ワイシャツの襟を整えてくれた。まだ少し眠たげな目元は、昨夜のどぎつい性的な毒気が抜けて、好ましい感じがする。

「オフィスに置いてある」

「そう」

「昨日の酒なんだけど——」

「ボトルキープ、できるよ」

「そう、したい」

「必要？」

「……うん」

「そう、わかつた」

「……本当は、君がもらってくれればと思つてた」

「おもぢやだつてキープできる、ああ、言つてなかつた、

おもぢやは一度使つたら買い取りになるからね。つま

り、ココはそういうトコだから、置いときたい服とかがあるなら、持つてくれればいいよ。」

ぱちんとウインクをしたルシファードに、ああ、彼は男娼だつたと現実に引き戻される。一緒に過ごしたほんの12時間で、まともにセックスもしていないのに、彼は確かに「理想の恋人」だと錯覚できるほど、完璧に演じきつていた。

「わかつた……ああ、会計は——」

「キヤッショ、クレカ、請求書送付の振込、なんでも、

好きな方法でできる」

「クレカで——」

「帰りにフロント寄つて、念のため言つとくけど、限

度額には気をつけて」

「わかつてる……その、今日の明細だけど

「うん」

「君の好きなように、つけていいよ」

「もうした」

無邪気に笑つたルシファードは、ぽんと僕の胸をタップ

した。

「そうか、よかつた」

「うん」

「…ありがとう、いい夢を見た」

「それが僕の喜び」

彼は、当然だとばかりに高い鼻を突き上げた。

「それじゃあ…」

「気をつけて」

踵を返し、エントランスに向かつた。

何も期待していない彼は、「またね」や「待ってる」とは言わない。

そして、虚しく聞こえた「気をつけて」

が、彼の思う最もふさわしい言葉だつたのか、僕には

わからない。

「待つて、デイヴィッド！」

ドアを開けた時、ルシファーに呼び止められた。

振り返ると、リビングに引っ込んだ彼が、「これ持つ

てきな」とオレンジジュースのパックをこちらに放つ

た。

なんとかそれを受け取つた僕は、「君は雑だな」と声を張つた。

ドアが閉まる寸前、隙間から、ニコニコとタバコを持つ手を振る彼が見えた。

レセプションには、昨夜の支配人代理が立つていた。要求された会員証を渡すと、彼は僕とカードを一瞥し、事務的にタッチパネルを操作した。

ロボットのような「お支払いはいかがいたしましょうか」に、クレジットカードを渡し、暗証番号を入力してこの日の精算は済んだ。

彼がくれたA4の明細の詳細も総額も、見ないで畳んで胸の内ポケットにしまつた。

「次の予約はいかがいたしますか？」と聞く支配人代理の目から、ついに警戒の色が消えていた。

「いや、いい…また電話する」

「かしこまりました」

彼に背を向け、丁重な「またのお越しをお待ちしてお

ります」を聞きながら、昨夜同様に薄暗いエントラン

スをリフトへ向かつた。

リフトを待ちながら、ポケットのオレンジジュースを思い出し、取り出してストローを刺した。

地階（1階）に降りていくりフトの中で、ジュースを飲んだ。そしてふと、このパックを投げた彼のラフさ

を嬉しく感じていることに気がついた僕は、また、彼

に会いたいと思つた。

ガーキンの地階には、ここの中の顔など知りもしない

ビジネスマン達が、忙しく行き交つてゐる。

ダストボックスにパックを放つて、僕は、オフィスに向かつた。

## 2度目のアクアブルー。

レセプションで会員証を出すと、「いらっしゃいます、5826様、2つ上階のルーム032でございます」とだけ伝えられた。初回のようだ、部屋までの案内はない。不必要なやり取りはないココのあるべき姿は、とても好ましい。

今夜の部屋は、前回とさほど変わらない趣きのスイートルームだつた。西向きの窓には、手前のセント・

ポールのドーム屋根の尖塔と、その奥に連なるウエストミンスターの美しい夜景が広がつてゐる。

部屋は薄暗く、リビングを覗いても、前回のように彼が歓迎に飛んでは来なかつた。

テレビはつけっぱなしで、テーブルにはスナックの袋

がつかりした。

それから毎日、金曜日を指折り数えて過ごしてゐた僕は、自覚している以上に暇で、退屈を持て余してゐることに気がついた。

とミネラルウォーターのボトルがあつた。

人の気配を感じてソファを覗くと、ルシファーが眠つていた。

「ルシファー？」

そつと肩を揺すると、彼は目を覚ました。そして僕に気づくと、少し慌てて、ふらふらと体を起こした。

「ああでいいがいいつど、ごめん、ねちゃつてた」

ソファに膝立ちになつた彼は、がばと僕の胴に抱きついた。

お約束らしい歓迎のハグにハグを返しながら、彼の様子が少しおかしいのに気がついた。

「どうしたの？」

ソファに掛けて覗き込むと、その目は虚ろで、肩がふわふわと揺れている。鼻につく甘い匂いには、覚えがあつた。

「葉っぱやつたの？」

「ウン」

「大丈夫？」

ルシファーはヘラヘラ笑い、また、僕に抱きついた。

「あんまり……ねえ、ふあつくしようよ」

「呂律が怪しいよ」

「……」

「大丈夫、じゃないね」

「んん…」

僕にしがみついたまま、ぐつたりとしてしまつた彼を抱えて、寝室へ運んだ。

ルシファーをベッドに寝かせてから、リビングに戻つた。カウンターキッチンには、前回キープしたウイスキーと、氷の入つたアイスペールやグラスが一式、トレイに用意されていた。

それを持って寝室に戻ると、ベッドに体を投げ出した彼は、変わらずヘラヘラと笑つていた。

「…ごめん」

「いいよ」

「よくない——」

「だろうね」

寝台に掛け、酒を準備していると、彼が「ちようだい」と手を伸ばした。

「君はこれ」

水を渡すと、彼は不満な唇を尖らせたが、大人しくボトルを受け取った。

そして僕は、適当に作った酒のグラスを持つて、ベッドの彼の横に座つた。

「…まさか、きみ、またくるとおもつてなかつた」

「いい酒をキープしてた」

「そのため？」

彼はぷつと吹き出した。

「それに、ぼくをしめいするなんて——」

「君が言つてた、『僕の客は9割リピートする』つて」

「ふふ」

「：僕は、君の客だ」

「うれしい」

「：」

「ふあつく、していいよ、しりがゆるゆるで、 ireやすいから」

「…どうして、ゆるゆる？」

「ひるの、きやく」

「…そんなにしたの？」

酒を舐めると、なんだか味が薄いような気がした。

「よじかん、いかされっぱなし」

「葉っぱ吸つて？」

「そう」

「オーバードーズしない量つて言つてた」

「…なんか、きまりすぎちゃつて——」

「くたくた？」

「うん」

水を飲み、ボトルを抱えたルシファーは、僕にもぞもぞと体を擦り寄せた。

僕の腹に回す腕や、收まりのよい姿勢を探す腰つきは、無意識ゆえか、無防備さが異様に色っぽい。

「：君は、24時間売りしてるの？」

「まさか、きょうはたまたま、ひるきぼうのきやくが  
はいつただけ、いれぎゅらー、きほんは、よるだけ」

「…休みは、ある？」

「ない…けど、すいようはやすみにしてる」

「連休、作ればいいのに」

「いいんだ、よやくがなればやすみにするし」

「そんな日はある？」

「あんま、ない」

クスクスと笑い、僕のグラスに伸びた手を「ダメ」と

掴んで、そつと下ろした。

「あと、たまにどようび、やすむ…」

「たまに？」

「くらぶでうたうひ」

「…どこのクラブ？」

「かむでんのまーけつとのうら、すてーぶるず…」

「エイミー・ワインハウスと歌つた？」

「…なんどかねたよ——」

「嘘だ」

彼はまた、クスクス笑うと、少し水を飲んだ。

「じゃあきみは、ひるは、どんなえらいじごとをして  
るの？」

「投資銀行のえらい人」

「わかいのに、すごいね」

「妻の親父さんが会長で、僕はコネ入社だ」

「ふうん」

「でも、数字に強いから、あつという間に役員になつた」

「できるおとこはすきだ」

「安く買ひ叩いて高く売る、ただの数字ゲームだ」

「いばつてるようになりえない」

「威張つてない」

「もつと、えらぶつていいよ」

「意味がない」

「みんなえらぶる」

「…それで君は、なんで…この仕事を？」

「…むかし、いいばいとがあるつてさそわれて、そ  
れから…しようとあつてた」

「…」

「ばんどうじやくえないからね」

そう呟いた彼は、ハハッと乾いた声で笑った。

「…」

「らくにかせげるし、てんしょくだ」

「…そう」

「…ねえでいぢいつど、おわびにふあつくしていいよ」

ヘラヘラしているが、その目は、どこか、必死に見えた。

「…今日はもう十分だろ」

「ただにしとく」

フラフラと体を起こして、僕に迫るルシファーの体を

抱き寄せた。

僕の胸で、とろんと溶けたように笑っている彼は、ど

うにも危なつかしい。

「そんな気分になれない」

グラスの酒を口に含み、彼に口づけた。

静かに顔を傾けると、察しがいい彼は喜んで口を開く。

その唇にアルコールを注ぎ込めば、僕の唇ごと吸い

取つた彼は、顎を上げてそれを飲み干した。

「…おいし」

上下した喉と、蕩けた目元が、なんとも艶っぽい。

「…ルシファー、君はとてもそそる」

「ン」

嬉々として、僕の口元に食いつきかけた唇を指で押さ

えた。

「…僕は男に興味がない、それでも、君に魅せられて

ると、思う…」

黒く縁取つた瞳を見開いたルシファーは、急に不安そ

うな、複雑な顔になつて僕に抱きついた。

だから、僕も、彼の背に腕を回した。

「…なんで、きたんだ…」

「君に、会いたかった」

「……」

「男に興味がないのに、変だと思う」

「…こうえい」

「…こんななくたくたになる日は、よくある？」

「めつたに、ない」

「そばそと、聞いたことない低い声がした。肩の後ろに隠れた顔は、見えない。

体を労つて、なんて言うのは、たぶん、余計なお世話なのだろうと思う。

「寝よう」

「……やだ」

「今夜は、僕が添い寝する番だ」

ルシファーの体を離して、シーツにゆつくり横たえた。

彼は、とても困ったような顔で、僕を見つめていた。

「ごめん……」

「おやすみ」

彼の体に、布団を被せた。

「こんなつもりじゃ——」

「おやすみ」

彼の目の上に、手を被せてそつと覆つた。

「……あつたかい」

「おやすみ」

「……」

ルシファーは、口を閉じた。

しばらく僕は、黙つて、彼の目を覆つていた。

手のひらで感じる彼は温かく、時々、微かに震えるまつ毛にくすぐられた。

そして、僕が作った沈黙の間に、ルシファーは眠つてくれた。

かざした手を離すと、眉に、疲れがこびりついているように見えた。

すうすうと繰り返す寝息を聞きながら、酒を飲んだ。

その規則正しい呼吸は、とても清らかに聞こえて、僕

はただ、それを聞いているだけでよかつた。

\* \* \*

翌朝。目を覚ますと、目の前の枕にルシファーの顔が埋もれていた。寝返りのせいか、枕カバーに黒いシャドウがこびりついた跡があり、アイメイクが薄くなつ

ていた。

出来心で、メイクを取つてしまおうと手を伸ばすと、  
眼を開いた彼に睨まれたからやめた。

「…起こした？」

「結構前に起きてた。けど、布団が気持ちよくて」  
眠たそうな目を閉じて、彼は腕を伸ばすと「ウウン」と伸びをした。

「そう、今何時かな」

「…10時くらい？…久しぶりに熟睡した気がする」

「そう」

確かに、ココのチエックアウトは11時だった。

「デイヴィッド、今日は休み、でしょ」

「うん」

「夕方までなら、延長ができる」

「じゃあ、少し、ゆっくりしてく」

「普通なら、朝から一発ハメてる」

ルシファーが、伸ばした舌で見えないペニスを舐め上げた時、部屋のチャイムが鳴った。

「朝メシ頬んどいた、今日こそちゃんと食べよう」  
舌をしまい、ぱつと飛び起きた彼は、僕の腕を強引に  
引っ張つた。

朝食は、6つのサービング・カートのビュッフェ・スタイルで給仕されていた。

ルシファーはブレックファストを盛り付けた皿を二人分作り、トーストやフルーツ、ヨーグルト、牛乳などをきてきぱきテーブルに並べた。

「腹ペコ」

僕のすぐ側に掛けた彼は、ポーチド・エッグをまるごと口に放り込んだ。

ウキウキとテレビに見入る様子はすっかりクリーンで、僕は内心ほつとしていた。

「ニュースが好き？」

「別に、世間話のために知つときたいだけ…きみは、

スクランブルエッグでよかつた？」

僕の皿には、スクランブルエッグが乗つていた。

「僕もポーチドがいい」

「そか、持つてくる」

「いいよ、これで、たまには」

「あそう」

「なんでスクランブルエッグ選んだの？」

「好きそうだから」

「適當？」

「うん」

ルシファーは悪びれなく笑い、ベイクドビーンズをも

りもり口に運んだ。そして、トースターからトースト

を持って戻り、一枚を対角に切つて三角にしたものを作

くれた。

「ありがとう」と受け取ると、彼は使い切りのスプレッ

ドを僕の前に丁寧に並べた。そして、咳払いをしてか

しこまると、ひとつひとつ紹介した。

「バターにストロベリー、ブルーベリー、マーマレード、

はちみつ、ヌテラ、マーマイト、ピーナッツクリーム

がございます、旦那様はどれがお好みですか？」

「ママレード」

「へえ意外」

「君は、ママイト？」

「はずれ、ヌテラ」

「意外でもなかつた」

「じゃあ當てないと」

トーストにヌテラをたっぷり塗りながら、彼はぱつり

と口を開いた。

「昨日さ」

「うん」

「ごめん——」

「何が？」

「…ショクム、タイムン？」

「誰も、君を咎めてない」

シリアスな陰がさした横顔を見ないようにして、トー

ストを平らげた。

「…」

「君もトースト、まだ食べる？」

「ウン」

「焼いてくる」

腰を上げると、彼は晴れ晴れとした顔を上げた。

「ねえ、ベーコンとトマトも持ってきて、あとそろそ

ろお茶淹れて」

「わかった」

何事もなかつたかのように、フォークでマッシュルームをつづいてる彼を、つい盗み見てしまう。

食事の間は、男娼であることをすつかり忘れているようだ。

「お茶、なんか入れる？」

「ミルク」

「うん」

「ありがと」とカップを受け取り、ニコリと微笑む顔も、ずごくいいと思う。

「君が笑うと、嬉しい」

「何、いきなり」

ルシファーは、小さく笑つてカップに口をつけた。

「思つたことを、言つただけ」

「ミルク、もうちょっと少ないほうが好き」

「…思つたことは、最終的に、言わないと気が済まない」

「最終的に？」

「すぐに口にすると、失敗に繋がることがある」

「なんか、苦労した？」

彼は、タバコに火をつけた。

「そうやつて、学んだだけ」

「…人が苦手？」

差し出されたタバコを咥えて、彼の咥えたタバコから火をもらつた。

間近で見る伏し目の彼は、出会つた夜と変わらず、それどころか、明るい昼間に見ればますます美人だった。ビジネスの対人は楽、それ以外は難しい、大概計算通りにならない

「頑張ってきた？」

「それなりに、日々勉強してる」

「えらい」

「…僕は、人がわからないし、愛とか恋とか、そういうの」

「うのもよくわからない」

「よくケッコンできたね」

彼はぼすとソファの背に埋もれると、大きく煙を吐き出した。

「妻が、好きになつてくれたから」

「…………」

「ビジネス以外は、相手に任せる方が、うまくいく」

数時間ぶりのニコチンを深く吸うと、うまかつた。

「…きみは、その苦手なことを、すごく頑張つてきたつてわかるよ」

彼がぱつりと呟いたそれは、嘘でも嬉しいと思つた。

「そう？」

「ウン」

「…ねえ君、なんでタバコの火をタバコでくれるの？」

「したいから」

「そう」

「シガーキスつていう」

「そりゃ」

「…ねえ、一緒に風呂入んない？」

「うん」

しばらく、彼も僕も、黙つてタバコを吸つていた。

誰も見ていないテレビの天気予報が、心地よいBGMに聞こえている。

前回も、今回も。彼が男娼であるとすっかり忘れてしまえるような、この、穏やかな日常を切り取つたような時間が、好きだと思つた。

「先に入つて」と言われるまま、浴室に行つた。

小さなプールほどのバスタブに浸かり、西の窓を眺めると、僕のオフィスが入つたビルが目と鼻の先に見えて不思議な感じがした。

「何見てるの？」

振り返ると、酒のトレイを抱えたルシファーは当たり前に素っ裸だった。

つい、見てしまつた陰部からそらした目を、もう一度

窓の外に向ける。気のせいでなければ、彼のペニスには、舌と同じようなピアスがついていた。

「僕のオフィスがある」

「こつちなんだ」

彼はトレイを脇のカウンターに置き、ジェットバスをオンにしてバスタブに入ると、僕の横に肩を並べた。

湯船にぽこぼこと泡が立ち始めたお陰で、その陰部は見えなくなつた。

「この部屋、風呂から外が見えるから好き」

「そういえば、前回は見えなかつた」

「開放的にファックできる」

「見られるの、好き？」

「外からは見えない」

「そうだつた」

「酒飲む？」

「うん」

ルシファーはざぶざぶとカウンターの方へ戻り、膝立

ちで酒を作り始めた。

湯から出た背の上半分に、あのタトゥーと、所々に見覚えのない赤い痣があるのが見えた。

「見えちゃつたんだけど——」

「おちんちんのピアス？」

「あー……うん、そう——」

「気になる？」

「まあ、多少は……」

こちらに背を向けたまま、彼は小さく笑つた。

「それ、邪魔じやない？」

「邪魔って言えば邪魔、ゴムがつければいいから、女性

に避妊してもらわないといけないし、尻は掘れない」

「そうなんだ」

「見る？」

彼はざばと立ち上がりと、両手にグラスを持つて僕の前に来た。

目の前に突き出されたそれを甘んじて拝むと、亀頭の

上面の真ん中から裏へと太いシャフト（軸）がまつすぐ貫いている。

「…痛かった？」

「そりやもう、でも、いいことだつてある」

彼はざばと肩まで浸かると、グラスをくれた。

「ありがと、…どう？」

「おちんちんの中を刺激できるから当然きもちいし、

コレで擦られる女性もきもちい」

そう言つて、彼はうつとりと酒を口に含んだ。

「自分の体が好きだつて言つてたから、意外だ」

「本当は、乳首にもしてた」

「どうしてやめたの？」

「両方の乳首に輪つかがぶら下がつてゐるの、なんか間

抜けに見えてやめた、見て、僕のキユートな乳首」

彼はまたざばと膝立ちになると、僕に胸を見せつけた。

乳首より、その周りや、鎖骨や、肩にかけて刻まれた

愛撫痕が目について、グラスに口をつけて目をそらした。

「ベニスはいいんだ…」

「ウン、それはそれ、メリットがでかい」

ルシファーは肩まで浸かり直すと、僕の足の間に座つて、背中を僕の胸に預けた。

「出るものに支障は？」

「角度が変わるからおしつこはコツがいる、せーしは

まあ平気」

「そうか」

「…何？」

滑り落ちそうな右肩に顎を乗せてみると、彼は僕の左の頬に猫か犬みたいに頬をなすつた。

まるで恋人のように、完璧に。あるはずのココロの垣根をたやすく乗り越えてしまふ、不思議な人だと、ようやく気づく。

左手を彼の腹に回すと、彼は左腕をそつと重ねた。

「…僕は、無精子だ」

「へえ、別に珍しいことじゃない」

僕の左肩に頭を乗せて、彼はのんびり笑つた。

「…でも、子供を作らなきゃいけなかつた――

「誰のために？」

•

「無理なことは無理だ」

くだらないと笑い飛ばしてもらえるだけで、何か、胸が軽くなる。

「……」「空虚を  
だろ?」

1

「……妻が浮気しても、見て見ぬフリをしてた――」  
「平気だつた、だろ」

「僕から言わせれば、きみはただの恵まれてる男だよ、ちよつとばかりアイに疎くて、タネが欠けてるだけの、クソがつくほど幸運な男だ」

「よく頑張りました」

は  
あ  
つ  
た

「夫婦二、准時二二二  
彼が掲げたグラスに、グラスをぶつけた。

「夫婦を 繼持してた」

「空虚、だつた」

「何年？」

「氣が遠くなる」

「…今になれば、あれは、なんだつたんだろうって、

思  
う

「ただのそういう人生だ」

ふいに体を返し、僕を覗いたルシファーは、なんだかとても悲しい顔をしていた。

「ごめん、言い過ぎた――」

「君の、言う通りだ。」

「きみは、僕とお喋りしたいんだ」

「…そう」

「いいよ、それでいい」

彼は、僕を強く抱きしめた。

その体を引き寄せるとな、浮力のせいか、彼は軽々と腕に収まつた。

「…僕も、きみには、難しい？」

僕は、首を横に振つた。

「…よかつた――」

「だけど君は、いろんな顔があつて、僕の知る限り、

最も理解できない不思議な人だ。」

「…」

「…だから、たぶん、惹かれるし、知りたいと思う

見開いた目は、メイクが消えかけてもなお大きく、そ

して、なんだか困つたように笑つた、ように見えた。

そして僕は、そうするべきだと思つて、恐らくルシファーは、そんな僕を察して、僕らは、唇を重ねた。

ジエットバスを止めて、雜音を消した。僕らが立てる水音と、口づけの隙にこぼれる苦しそうな吐息だけが聞こえていた。

すべらかで、柔らかく跳ねる体は、僕の腕の中で、波間を漂う葉っぱみたいに滑つた。腕に力を込めるほど、手からすり抜けてしまいそうで、僕は、無我夢中で彼を抱いた、というより、しがみついていた。

「僕も、キスマーカ、つけたい――」

「いっぱい、して…」

左の肩には、先客の歯型があつた。だから、右の肩に噛み付いて吸つた。物足りない気がして、そのまま首筋を噛んで、鎖骨を吸つて、乳首を啜つた。それでも、他人の痕のほうが多いから、目につく限りの肌の白い所を吸つた。

そのたびに彼は、僕の髪を撫でて、頬を撫でて、顔が近くにあれば、頬を引き寄せて、額やまぶたや頬や鼻に口づけをくれた。

彼をどう抱いていたのか、もしかしたら抱かれていたのか、どう導かれたのか、よくわからない。浴槽に面した窓には、水色の空と、よく知つた金融街が広がつている。

窓についた彼の両手に僕の両手を重ねて、彼の背に唇を押し付けて、無心で腰を前後していた。

薄青の大理石の窓台に口づけでもするように、うなだれた唇から、切ない呻きのような声が細々と漏れ続けている。

尻の中は、一旦交われば女性器とそう変わらなかつた。

それよりもきつく、妙に硬い所を擦れば彼は大きく喘

ぎ、一段と狭い奥の窪みに亀頭をねじ込めば、その背の翼が飛び立つてしまいそうなほどしなつた。それは、本当に生きているように綺麗で、誰かの痕も気にならなくなる。夢中で腰を打てば、赤らんでいく背はます

ます生きて、僕を圧する中は焼け付くほど熱くなつた。  
「…い、ぐ、いぐ…つ、い、ぐ…」

体が深く交わる度に、彼は、うわ言のように「いく」と口走る。その声一つ、爪先の動き一つとっても、男娼さながらに乱れたり、僕を一層焚きつけるような素振りはどこにも見えない。

彼の意はわからない。だから、僕は、彼が見たいと思う。体を繋げたまま、彼の体を仰向けに返してみる。

僕の角度がよくなかったのか、彼は苦しく呻いて、浴槽の縁に崩れ落ちるように横たわつた。

腹に倒れたペニスが、僕の腰に合わせて跳ねていた。腹から胸はひくひくと震え、切なく開いた唇から、上

ずる吐息が溢れていた。

「…気持ち、いい？」

ルシファーは、何か、悔しそうに僕を睨んだように見えた。ほとんどメイクが落ちた瞳いっぱいに、涙が溜まつていた。

彼をよくしなければ、その一心で、彼が腰を浮かせ、

体をよじるほど喘ぐ所を突いた。

「も、もおつ…」

強くしがみつかれて、首から背に鈍い衝撃が走った。

彼を抱き、掴んだ腰を押さえながら腰を打ちつける。腕の中で、大きく跳ねた体が、硬直する。

「——ぐッ！——！」

腹で押しつぶしたペニスが脈打つのを感じながら、僕

も、彼の中に射精する。

「あ、あ、あ…」

引き寄せられるように、快楽に喘ぐ唇を重ねた僕らは、切れ切れの吐息を奪いながらキスをした。体を離すと、彼のしづんだペニスから僅かな精液が滲み出た。

胸から腹へ唇で這い下りて、亀頭を口に含んでみると、

彼は「うう」と腰を反らした。

強く吸つて、しょっぱいような残滓の味を知る。ピア

スを舌で揺らせば、甘く呻いた彼は、僕に手を伸ばした。

「君の尻は、すごく気持ちよかつた、それと、精子は薄くて、あんまり臭くなかった——」

「だまつて」

僕を睨んだルシファーは、どういうわけか、辛そうにくしやりと顔を歪めた。

「どこか、痛い？」

「だまつて」

乱暴に髪を掴み、頭を手繩り寄せて、僕らはまた、キスを重ねた。

何かに憑かれたように、恍惚に痺れた舌を吸い合う僕らは、本当に、セックスをしているような気がした。

ルシファーの胸を枕にして、バスタブの浅いステップに寝転んでいた。

彼は僕の胸に手を置いて、体毛を指先で引っ張つたり梳いたりして遊んでいる。

ぶくぶくと僕らをくすぐるジェットバスが気持ちよくて、至福だと思つた。

「このぶくぶく使つてファックするのも、きもちい」

「どうやつて?」

「おちんちんに当てる」

「湯船の中ですか?」

「もちろん」

「お尻に水が入る」

「案外平気」

「…僕は、本当は、セックスも、よくわからない」

彼は、僕の頭を小動物にするように優しく抱いた。

髪をいじられると、頭皮も気持ちよかつた。

「何をすればいいのかも、ひとりでするものじやない  
ことも、わかつてる」

「ウン」

「…だけど、オモイヤリが、よくわからない」

「…」

「…さつきの君は、楽しそうじやなかつた――」

「そんなことない」

彼が、僕の頭に唇を押し付けるのを感じた。これも、

温かくて気持ちがよかつた。

「…だけど、本当に、セックスしてゐみたいだつた――」

「したよ」

「…」

「した」

「うん」

「おいで」

「…」

「…」

「…」

体を起こすと、ルシファーは僕を強く抱きしめた。

すべすべした肌がとても気持ちよくて、僕は、これだけでも満たされるように思えた。

「君が全然男娼に思えなくて、こうしてばーっとして  
る時が、一番いい」

「ウン」

「…だけど、オモイヤリが、よくわからない」

「…」

彼は、なんだかたくさん頷いて、僕をもつともつと強く抱きしめた。

風呂から出ると、ルシファーはそそくさとメイクをして男娼の顔に戻った。

少し残念に思つたが、仕方がないのだろう。

そして僕らは、3時間ほど昼寝をした。

昼過ぎからは、朝食の残りをつまんだり酒を飲んだり

しながら、ニンテンドーのゲーム機をテレビに繋いで遊んだ。

「ココでゲームなんでしたことない」とルシファーは笑い、手間取つていたから僕がセッティングした。さすがにこんな物まで用意されているとは思わなかつたが、僕にとっては、寝室のチエストに山程取り揃えてある大人のおもちゃより数倍ありがたい。

ルシファーが「マリカならできる」と言うから、プレーすることにした。

彼は「絶対負けない」と自信满满にテーブルに足を乗つけて、僕も、真似をして足を乗つけた。

初戦、僕は彼に大差をつけて勝ち、彼は「コントローラーが使いづらいせ이다」と悔しがつた。だから、次

のカップでハンデのために速度の出ないマシンを選んだのに、それでも僕が勝ち続ける。

ついに不貞腐れてしまつた彼は、レースが終わるたびに唇をへの字に結んで、僕を憎たらしげに睨んだ。

そのたびに僕は「ごめん」と謝つて、彼は大人気なく「タバコ一箱で許す」と膨れた。

「わかつた」と返事をすると、彼はフンと頸を上げて僕を見るから、キスをすると機嫌が直つた。

キスは、唇を雑にぶつけたり、掠めるだけだつたり、フェイントで彼の鼻の頭にしり、唇に噛みつかれたりと、じやれているだけだつた。

それでも、キスの後に向けられる笑顔はとても作り物には見えなくて、それがなんだか嬉しくて、僕はいつまでも、レースで彼を負かし続けた。

楽しい時間ほど、過ぎるのは早い。

タイムリミットの、16時。

ルシファーは、今夜も仕事があると言つていた。

エントランスのドア前で、彼は前回のように、僕の身だしなみをチェックして、整えてくれた。

「いいんだ、帰るだけだし」

彼は「そう」と言いながら、僕の左側頭部の髪の乱れを直している。

「ありがとう…今日は、もつと最高の夢だつた」

「ウン、その分“高い”よ」

彼は、満悦といった顔でニコニコしていた。

「毎日、こうだつたらいいって思った」

「…ほんとに」

彼の苦笑いが、何を意味しているのかわからなかつた。

「これは、たぶん、余計なお世話だと思うけど…」

「…？」

「体に、気をつけて」

そう口にした時、前回の別れ際、彼が「気をつけて」と言つていたことを思い出した。そしてこれが、彼と

僕の、最適な別れの挨拶なのかもしれない、と思つた。

「…ありがと」

「じゃあ」とドアへ体を返そうとした時、ルシファーに腕を掴まれた。

何?と聞く前に、彼は僕を抱きしめていた。

「どうしたの?」

彼の背に腕を回すと、温かかつた。

そして彼は、僕に、長くも短くもないキスをくれた。

僅かな湿りで張り付いた唇が、離れ難いようにゆつくりと剥がれた。

「これは、サービス」

彼は、なんだかぎこちなく笑つた。

「…わかつた」

「じゃあ、また」

ドアを出て、閉めるその隙間から、ぎこちなく笑つたままの彼が、俯くのが見えた。

レセプションには、例の支配人代理がいた。

前回同様、事務的に会計を済ませ、明細の詳細を見ず

に胸のポケットにしまった。

「次回の予約はいかがいたしますか?」

「頼みたい、ルシフナーの、直近の空いてる夜」

「少々お待ちください」

支配人代理は無言でタブレットを操作し、しばらくして「来週の火曜にご用意ができます」と言った。

「そこで、よろしく」

「かしこまりました」

「…申し訳ない、できれば僕には『ご用意』って言葉は使わないでほしい、規定かもしれないが…」

「…かしこまりました」

支配人代理は、一瞬怪訝な顔をした後で、懇懃に承知した。

「火曜に可能です、とかでいい」

「わかりました」

「じゃあ」

ルシフナーは、水曜が休みと言っていた。翌日、今日のように延長はできないかも知れない、それでも。

そんなことを考えながら、エントランスのリフトに向かつた。

リフトを待ちながら、『ご用意』という言葉を反芻していた。ご用意されるのはルシフナーではなく『サービス』全般で、恐らく深い意味はない。それでも、その、商品然としたワードを不快に感じた。

リフトの中で、ルシフナーの『サービス』を思い出していた。あんなことをすれば、客が離れるはずがない。

悪い男だと思った後で、それは単に彼のやり方で、思われぶりであるほどうまくいくのだと自分に説いた。そして例外なく、彼の思う壺に違いない僕は、また彼と、マリオカートをできる日を心待ちにしている。ガーキンの外に出て、空腹を覚えた。出る前に、彼と何かを食べればよかつたと残念に思った。

そして僕は、繁華街へ向かつた。

\* \* \*

「いつ？」

「申し訳ございません——」

「もういい、今日はキャンセルしたい」

「承知いたしました」

翌週の火曜日。仕事を終え、夕食も摂らずにアクアブルールーへ向かつた。

レセプションで僕を出迎えた支配人代理は、僕の顔を見るなり、固い声で「ルシファーは辞めました」と告げ、「大変申し訳ございません」と詫びた。

「辞めた」の意味が瞬時に理解できなかつた僕は、しばらく突つ立つていた。

「他の者でよろしければ……待たせております」

よろしければ、の後に、「ご用意」と言いかけた彼の

顔は、事務的に申し訳なさを取り繕つているに過ぎない。

「すぐに、連絡してほしかつた」

「申し訳ございません、こちらからは連絡を差し上げない規定がございます」

「どうして辞めたの？」

「申し訳ございません」

支配人代理はあつさりとタブレットを操作し、僕の予約を取り消した。

踵を返すと、「次のご予約は」と呼びかけられた。

「…退会、したい」

「…早急、かと」

初めて、彼の声が動搖するのを聞いた。

「手続きなんかは後日する、また連絡する」

「かしこまりました」

ココを出るリフトを待ちながら、ルシファーが辞めた理由を考えていた。見当がつく理由を飲み込もうとすれば、酷く息苦くなる気がした。

リフトの中で、ルシファーが話していたことを思い出していた。

ガーキンを出た僕は、僕のオフィスビルの車止めに向

かつた。

キヤストの個人的な話は、嘘だと思え。ルシファーーはそう言つていた。それでも、調べずにいられない。

カムデンには、ステーブルズというマーケットはあっても、ライブハウスのようなものはなかつた。そして、マーケットとは逆方向、カムデン・タウン駅の周辺に、ナイト・クラブとジャズ・クラブ、そしてブルース・クラブの3軒があつた。

いてもたつてもいられず、カムデンに車を向けていた。赤信号で停車するたびに、馬鹿げてると自分に呆れ、底のない落とし穴に落ちていくような気持ちになつた。

それでも、ハンドルを別方向へ切つて、彼のいなない日々に戻る気になれなかつた。

ホームページを見る限り、ナイト・クラブとジャズ・クラブは規模が大きく、スケジュールも先まで詳しく

知ることができた。そして、どちらも、土曜に特定のバンドやシンガーが出演している事実はなかつた。

一番小さい規模のブルース・クラブは、ライブ・ハウスというより生演奏を楽しむレストランの趣が強い。曜日ごとにイベントが決まっていて、土曜はジャム・セッションが行われている。彼の名前などどこにも見えなくとも、僕は、このクラブへ向かつた。

ブルース・クラブに入ると、フランクな受付の女性に「ご予約は?」と聞かれた。

「申し訳ないんだけど、バンドや出演者のブッキングをしてる人か、この辺りのミュージシャンに詳しい人がいたら、話をさせてもらえないかな?」

「出演希望?」

「違うんだ、人を探してて、シンガーで…」

僕が探しているのは、架空の歌手だ。わかつていても、諦められなかつた。

彼女はぱちぱちと賢そうな目を瞬くと、「ちょっと待つて」と奥に引つ込み、ブッキング担当だという中年

の男を連れて戻った。

彼自身もミュージシャンであることがわかるなりに、

虚しい期待はにわかに膨らんだ。

「忙しい所申し訳ない、人を探してるんだ、シンガーで――」

「どんな奴？」

彼は気さくそうだつたが、僕を訝しげに見ることを隠

そうとはしなかつた。

「僕はこういう者で」と名刺を渡し、続けた。

「名前はルシファー。年齢は40前後、若く見えるかも

しれない：黒髪の白人男性で目が大きい、瞳の色は灰

青で、身長は180弱の中肉。パンク風か、ゴスっぽ

い感じで、アイメイクをしてて……」

自由で、自信家で、率直で、偏見がなく、愛嬌があつ

て、無邪氣で、可愛らしくて、優しくて、色氣があつて、

甘えるのがうまく、タフで、メンタルがたくましい……

僕の知る“男娼”的人物像は、言うべきではない気が

して胸にしまった。

「どんな歌を歌つてる？」

男の間に、言葉が詰まつた。

「……」

「とにかく、ルシファーなんて奴は聞いたこともない」

「そーね、ルシアンなら知ってるけど」

受付の女性が、横から口を挟んだ。

「ああ、特徴は似てるな」

男の言葉に、息が詰まつた。

「詳しく聞かせてもらえる？」

「ルシアンはオルタナとかグランジとか歌つてる……ボ

スト・パンクといえばパンクかもな」

「特徴は似てるけど、メイクはしてないよ」

彼らの言葉に、胸が高鳴つた。

「ここに出演する？土曜日とか――」

「いや、うちには年に数度だ」

「彼は普段、ケイヴに演てるはず」

「それ、どこ？」

「そのマーケットの向こう側、高架下のクラブ」

「土曜日かな…？」

「そこまではわからない」

「ありがとう、行つてみる」

礼のチップを渡そうと懐を探ると、男はやめてくれと首を振つた。

「いらないよ、客として来てくれれば十分だ」

「そうする、親切にどうもありがとう」

彼らに礼を言い、はやる気持ちを抑えて店を出た。

ケイヴは、彼らが教えてくれた通り、ステーブルズ・マーケットの裏の高架下にあつた。古着屋の脇の階段を降りた地階にあり、規模は先のブルース・クラブの半分程、テーブルが20程度のささやかなクラブだった。入り口の簡素な看板は見逃しやすく、そこにあると知らなければ一生辿り着けなかつただろう。

覗いてみると、小さなステージではバンドが歌つていた。レストランというよりダイナーの趣で、ステージ

対面のバー・カウンターに立ち、バーテンダーらしきタトゥーだらけの青年に声をかけた。

「ちよつといいかな？」

「ご注文は？」

聞こえないという素振りをした彼に、声を張つた。

「ハーフ・パイントのロンドン・プライド、1つ」

渡された酒に口をつける前に、聞いた。

「ルシアンつて知つてる？」

「知つてるよ」

「ここで歌つてるって」

「ああ、今日は出でない」

エールを一口舐めて、深呼吸をした。

「次は、いつ出るかな？」

彼はスケジュールらしき紙に手に取ると、めんどくさそうに眺めた。

「…来週の、土曜だ」

「なんてバンド？」

「SLEEPLESS TOWN」

「ありがとう」

エールをもう二口飲んで、ケイヴを後にした。

\* \* \*

翌週の土曜。日が暮れる頃、カムデンに向かつた。

ケイヴに入ると、よく知つた気がする男がステージに立つていた。薄暗い店内の、暗い青のライトに照らされて、上手くはないが下手すぎもしないバンドの真ん中で、彼だけは、白く光つて見えている。

僕は、先日のように、ステージ対面のバー・カウンターに掛けて、彼を眺めていた。

ルシアンという名のシンガーは、僕の知る男娼ではなかつた。手指にアクセサリーはなく、黒いタイトなTシャツにジーンズ、エーディングのエンジニアブーツの格好はまるで氣取りがない。かろうじて、耳のピアスだけはそのまま、ふと湧き上がる別人かもしけないという疑念と不安を払拭できた。

「失礼、少し、いいですか？」

バンドメンバーが一斉に僕を見て、数拍遅れて、ルシ

マイクはせず、悲哀や絶望をたんたんと歌う素顔には、見たことがない表情が浮かんでは消えていく。力があるが、どこか物寂しい声は、泣いているように聞こえた。

そして、僕に気づいたルシアンは、ほんの瞬間、微笑んで、歌を続けた。

そして、残りの9曲が終わるまで、彼が僕を見ることはなかつた。

SLEEPLESS TOWNがライブを終え、店内が明るくなつた。次のバンドがステージ準備を始めた頃に、ルシアンと彼のバンドメンバーが現れ、空いているテーブルに掛けた。

すぐに声をかけるべきか、迷つた。それでも、ギネスの残りを飲み干して、彼に向かつた。

「失礼、少し、いいですか？」

アンが僕を見上げた。

「…やあ、デイヴィッド、久しぶり」

彼の朗らかな声に、じろじろと僕を見るバンドメン

バーの空気が和らいだ。

「ダチ？」と聞いたギターの男に、ルシアンは「そう、地元の馴染み」と笑った。

そしてルシアンは「ごめん、もう行く」と席を立ち、「出よう」と僕の腕を引っ張つた。

外へと続く防音扉を出る手前、振り返ると、バンドのメンバーは既に談笑を始めていて、そして、次のバンドがステージで歌い始めた。

「ルシアン…？」  
「芸名」

彼は、バツが悪そうな顔で笑った。

なんだか落ち着かず、そわそわした気持ちになるのは、メイクのないまつさらな顔が、一層美人に見えるからかもしれない。

「君は、ルシファーとかルシアンとか、天使っぽい名前が多い」

「ルシファーは墮天使だし廃業した、ルシアンなんて名前の天使はない」

「つぱいって言った――」

「マイケル」

「…」

「僕は、マイケル」

「わかつた」

「メシ、奢つて」

「うん」

ケイヴの外に出ると、夜が更けた街には霧雨が舞つていた。

革のジャケットを羽織つたルシアンは、何も言わず、スタッフと駅の方へと歩いていく。

「待つて…」

小走りで彼を追い、彼の横を歩いた。

僕らはそのまま、ハイ・ストリートを南下して、例の

ブルース・クラブへ向かつた。

この夜、ブルース・クラブの客の入りは半分ほどだった。ここを選んだのは、先週の礼のつもりと、遅くまで営業しているのを知っていたからだ。

ステージでは、初老の黒人男性がギターの弾き語りをしていて、うるさすぎない店内がありがたかつた。「この店、知ってるの？」

「世話になつた」

「世話？」

「ルシアンの手がかり」

「そう」

テーブルについたマイケルは、ギネスとサーロインステーキとサラダを頼んだ。僕は、ジンジャエールと水とサーモンステーキを頼んだ。

「飲まないの？」と驚く彼に、「車で来たから」と答えると、彼は「そう」と笑つた。

「なんだか、別人に見える」

「人にはいろんな顔がある、ガーキンと同じ」「…やつぱり、メイクしていないほうがいい」

「あんま言わないでくれる？ハダカにされた気分だ」「苦笑して、彼はサラダをつついた。

「…君も、裸は恥ずかしい？」

「僕にはふさわしくない？」

彼の笑顔が強張った気がして、焦つた。

「違う、そんなつもりじゃない——」

「ちゃんと恥ずかしいよ、これでもね」

「そう…」

彼が「うまいよ」とどつさり野菜を刺したフォークを差し出したから、食べた。

メインディッシュを食べている間、彼も僕も、話をしなかつた。

僕は、この、マイケルと名乗る彼と再会が叶つただけで、言葉にしきれないもので胸がいっぱい、あまり食が進まなかつた。

見慣れぬ顔は、どれだけ見ても見飽きない。目が合う

たびに、彼は「食べづらい」と顔を背けて、照れ笑い

のようなものを浮かべた。だから、ますます目が離せ

なくて、彼もますます食べづらくなり、結局、彼もあ

まり食が進まないようだつた。

「なんで…辞めたの？」

彼のステーキの残りが3分の1になつたところで、僕は、口を開いた。

ゆつくり酒に口をつけたマイケルは、なんだかぎこちなく笑つた。

あの二度目の別れ際、同じような顔で笑つていたルシファーを思い出す。

「好きでもないヤツの恋人ヅラして腰振るのが馬鹿らしくなつただけ」

さりと吐き出された言葉に、ドキリとした。

彼に「本命」ができたことは、もはや疑いようがなかつた。

「…それが、君の仕事だ」

そう言つてみた後で、僕は、何か辛い気持ちになつた。

「…それに、もう体力的にも限界きてたし」

「…」

「潮時、つてやつ？」

「そうか――」

「ごめん、急だつた…きみの予約、あつたのに…」

「…いいんだ」

本当は、よくなかった。本当は、アクアブルーでそうしたように、話をしたり、ゲームをした時のような時間を使過ごしたかつた。

だから、言わずにいられなかつた。

「僕は、君と話したり、ゲームをしたりしたい…」

「…」

「だから、君を探した…」

「…」

「でも君はもう、そういう人じやなかつた」

「…」

「付き合つてくれて、ありがとう」

「…それが、君の仕事だ」

「送つてく——」

「きみん家、あのゲーム機あんの？」

彼は、なんだか難しい顔をしてポテトをつづいていた。

「……ない」

「行こう」と彼は立ち上がり、グラスの残りを飲み干した。

「どこに？」

彼は、「きみん家」とニコニコしている。

「……どうして？」

「もうガーキンは使えないし、僕ん家は人を入れたくない、だからきみん家か、それか、どつかのホテルか」

「……わかつた」

僕も席を立つたが、彼の考えていることはよくわからなかつた。そして、やっぱり彼は不可解だと思いながら、それでも、もう少し彼と過ごせることを嬉しく思ひながら、会計を済ませた。

さそうに見えた。窓枠に肘を置いて頬杖をつき、フンと鼻歌を歌つてゐる。とりとめのないメロディは、知つてゐるものもあれば、わからないものもあつた。

「……君が歌つてる時、すてきに見えた」「そう？」  
「本当は、音楽もそんなに得意じゃない——」「好きか嫌いかでいいんだ」「……いいと思った」「ありがと」「泣いてるみたいだつた——」

彼はフフンと笑い、「家、どこ？」と話を変えた。

「ゲンジントン」

目が合うと、彼は「前見ててよ」と笑い、「タバコ吸つ

ていい?」と聞いた。  
灰皿を示すと、彼はタバコに火をつけた。  
「……君は、個人的な話は嘘っぽちだつて言つてた」「ウン」  
「なのに、嘘じやなかつた——」

自宅に向かう車の中で、助手席のマイケルは機嫌がよ

「嘘もついてた」

彼は、さめた横顔でタバコを燻らせている。

「…どうして、嘘をつかなかつた？」

「ついてほしかつた？」

首を横に振ると、長々と煙を吐く口元が、微笑んでい  
るのが見えた。

「…ケイヴは、グーグル・マップじや探せなかつた」

「よく見つけたね」

くつくつと低く笑う声が、心地よかつた。

「君の嘘じやない嘘のおかげ」

「ねえ、ちょっとスマホ貸して」

僕のスマホを手渡すと、彼は、何かを手早く操作し始  
めた。

「何？」

「アマゾンでゲーム機買つた」

「そう」

「明日届く」

「わかつた」

楽しそうな声を聞きながら、僕は、車をガレージに入  
れた。

\* \* \*

「庶民の夢、つて家だ」

僕のアパートメントに来たマイケルは、リビングから  
キツチン、ダイニング、応接間、2階の寝室やバスルーム、書斎まで一通り覗きながら、ウキウキとした声を

上げた。

「君だつて、いい所に住んでるんだろう？」

聞いた後で、彼が稼げる仕事を辞めたことを思い出し  
た。

「でも戸建てじやない、フラットだ」

「どこ？」

「カムデン」

「そう」

「いずれ、引き払う」

「どこに行く?」

「まだ探してない」

マイケルはアイランドキッチンと冷蔵庫の中を確認する。「ボンベイ・サファイアがあるじやん」と勝手知つたように酒を作り始めた。

カウンターのスツールに掛けて、彼の手際を見ていた。

彼は、シェーカーに氷と2分の1カップのジンとティースプーンに半分のオリーブジュースを入れ、器によくシエイクを始めた。

「君がバーで飲んでるバーナーなら、行きたいと思つた」

「昔、ちょっとやつてた、復職しようかな」

「…転職活動中?」

「まだのんびりしてる、蓄えはあるし、多少は運用してくるから」

「そうか」

シェイクを終えた彼は、「ベルモットがないけど、いつか」とマティニークラスの縁から酒を注ぎ、オリーブ

の実を入れたものを僕の前にことんと置いた。

「どーぞ、あるギタリスト直伝のダーティー・マティー

ー」

「誰?」

「秘密」

舐めてみると、オリーブがジンの辛さをまろやかに包み、少しショッパイ、癖になる味だった。

「強いね」

「少しずつね」

ウイスキーのロックを適当に作つた彼は、僕の隣のスツールに掛けた。

そしてしばらく、肩を並べた僕らは、黙つて酒を飲んでいた。

彼を探し出してまで話したいと思っていたはずが、実際彼を前にすれば、話したいことは特になかつた。

まるで、真空管の中のような静寂に、僕は、酷く居心地が悪くなつた。

「…マイケル」

初めて彼の名を口にしてみると、馴染みのない発音に、

彼を少し遠く感じた。

「ン？」

「君は：誰か、いい人ができたの？」

「…いい人？」

彼のグラスの氷が、カラーンとやけに大きな音を立てた。

「売りを辞めたのは、そのせい、だろ？」

「…ウン」

「じゃあ、僕に付き合わないほうが——」

「デイヴィッド」

怒っているように聞こえた声に、反射的に顔を向ける  
と、目の前にマイケルの顔があつた。「何？」と開き  
かけた口を、唇で強引に塞がれた。

冷たい舌が僕をねじ伏せ、冷えたピアスが舌の中心を  
真つ直ぐ奥へと擦る。背筋がぞくりとして、溜息をつく  
と、彼は静かに唇を離した。

「売りは：辞めたんだろ？」  
「そうだよ、辞めた」

頬を包む彼の両手が、柔らかく僕を撫でていた。

「でも、ちゃんと払うよ：キヤツシュは手元にないから、すぐには払えないけど——」

「本気で言つてる？」

その顔が、なんだか苦しく歪んでいく。

「もちろん——」

「きみは、ほんとに…」

彼は、今にも泣き出してしまいそうに見えた。

「…？」

「きみの奥サンのウンザリがよくわかる」

その声は震えていて、僕は、やつぱり人は難しいと辛く思つた。

「…」

「ごめん、ちゃんと言わない僕が悪かつた」

「何？」

「僕が悪い、きみは気にしなくていい」

「…どういうこと？」

「デイヴィッド、僕は、きみが好きだからここにいる」

「…」

「売りをやめたのは、きみが好きだからだ」

マイケルの言うそれが、にわかに信じ難かつた。筋はない。

通るが、解せないことがあつた。

「でも、そしたら、会えなくなつた――」

「だからきみは、僕を探した」

「そう――」

「来てくれると思つてた」

切なく笑う顔を見ていると、胸がヒリヒリした。

「ねえ、ディヴィッド」

彼の言わんとすることが飲み込めてきた僕は、頷くことしかできない。

「僕のディヴィッド…」

「僕は、君がここにいてくれるだけで、すごく嬉しい――」

「こういう時は、『愛してる』って言うんだ」

「…ああ」

「…」

「…あいしてて」

僕には、愛しているということが、今でもよくわからぬ。

それでも、彼が、その目にいっぱい涙をためて笑っているから、これでいいんだと思う。

「僕は、うまくない…ごめん」

マイケルを抱きしめて、謝つて、目眩がするほど口づけを交わしていた。

「わかつてる、勉強すればいい」

僕の耳を喰んで、楽しそうに囁く彼に、あつという間に裸にされた。

彼は、迷子の子供の手を引くように、彼の体へ僕の手足を上手に誘導していくた。

ベッドに座り、彼を背後から抱いた。忘れられない、

あの不思議な体臭を嗅ぐだけで、息が詰まるほど胸にこみ上げるものがあつた。

僕を振り返り、唇が重なるすれすれの所で、彼が囁く。

「おっぱい触つて」

「…あいしてて」

Tシャツを脱がそうとする手を、胸に導かれる。

「シャツの上から」

胸を手のひらに収めてみる。僕の指を跳ね返す弾力を

鬻掴むと、彼が笑つた。

「まるく揉んで」

円を描くよう揉む。彼が舌を伸ばしたから、ピアス

を噛みながら吸つた。

「乳首、触つて」

指で探ると、固くなつたそれの形がわかる程、勃つて

いる。

「こんなシャツ：卑猥だ」

「つて、知つてれば、やりたくなる」

尖つた乳首をつづいていると、彼が「爪でかじつて」と囁いた。

恐る恐る引っ搔いてみると、彼は「んん」と僕の胸に

しなだれる。

搔き続いているうちに、彼はもぞもぞ腰を動かし始めた。眉間に寄つた皺が、苦しく見える。

「…大丈夫？」

「きもちい」

「直接、触りたい」

「まだ…そのまま、<sup>まま</sup>揉んで、捏ねて」

そつと、布ごと摘んでねじつてみる。

「もつと強く」「こう？」「もつともつと」「こう？」

潰れてしまつと思うほど力を込めていくと、抱いた背が反つた。

「ああッ、いい」

うねうねと揺れる尻が、僕の股を擦る。

気がつけば、僕は、勃起していた。

「直に、触つていよいよ」

シャツを脱がし、抱き直した体は、まるで発熱しているように熱い。

「直接触る時は、爪を立てちやだめ」

微笑む唇に口づけると、早い吐息が僕を急かした。

「どうすればいい？」

「指をワイパーみたいにして、引っ掛ける」

「ワイパー」

「指の腹で…そう、それでいい」

「うう、いいの…？」

弄る乳首は、僕の指がかかるたびに、ぶるぶるとかわ

「物語」

「君の乳首は、本当に、キユートだ…」

優しく  
搞んで 捏ねて

僕のペニスに押し付ける。

ねじるほど硬く尖つてい

ねじるほど硬く尖つていく乳首の感触に、昂奮を覚え  
た。抱いた背は汗ばんで、僕の胸にじつとりと張り付  
いた。

「そのまま・乳首の先を、擦つて」

1  
うん

親指と人差し指で摘んでいては、できない。親指と中指で摘み直し、人差し指で乳首の先端を擦つた。

一  
ン  
ツ  
・  
あ  
！

彼の腰が大きく跳ねて、胸から腹が不規則にひくつい

乳首の先を擦るたび、彼は甘く喘いで、激しく腰を振る。

「君のおっぱい、すごいね」

奥?

おちんちんの奥、の意味はわからない。それでも、彼が喜んでいるから、繰り返し乳首の先を擦つた。単調ではよくない氣がして、強弱をつけて、擦る指を早めで、彼が一番喜ぶ触り方を探していく。

「で、い、う、い、つ、そ、お、あ、あ、い、つ、ち、や、う、つ、…」

二

強く、指先を押し込むと、彼の腰ががくがくと跳ねた。  
「アアア」と開いた唇から舌を引きずり出し、吸いながら舐つた。彼の胸に浮いた玉の汗を拭つて、もう一

「あ、アア」

僕の指に合わせて揺れる尻が、僕のサオを摩<sup>モ</sup>する。

先走りで濡れた亀頭をなすりつける腰も、流れ落ちる

ほどの汗にまみれていた。

「……でいぢいつど、おちんちん、いれて」

「ちゃんと前戯、してない」

「はやく」

「でも――」

「までない」

「わかつた」

彼のジーンズと下着を脱がすと、精液で濡れたペニス

がくたりとこぼれ出した。

あれだけでいけるのかと驚いた後で、彼をいかせた事

実に息苦しいほどの昂奮を覚える。

僕に背を向けたまま、彼は、僕の腰の上にカエルみた

いにしやがんで、尻を揺らしている。

「おちんちん、はやくいれて……」

「うん」

彼の腹を抱え直し、亀頭でアヌスを探つた。

「ここ?」

「そお…」

ズぶと肉を割る鈍い感触に、抱えた背がよじれ、翼が歪んだ。自らの肉を搔き分けて、僕をズぶずぶと飲み込んでいく彼は、僕に尻を沈めきつたところでがくんと天を仰いだ。

「……お、おツ」

「ん、ぐ……」

「……お、おツ」

スプリングをギシギシ軋ませながら、白い尻が、リズミカルに僕を吸い込んでは締め上げる。腰をくねらせ、誘い込んだ僕の亀頭で、硬く柔らかなところを擦り続

けている。

「ああッ、あ、そこ、いいッ、ああ……！」

振り乱れるペニスから、とめどなく先走りが溢れては飛び散つている。

「……こが、おちんちんの、裏……？」

「そお、きもちい、きもちいよお……」

「こりこり、してる」

「おちんちんで、そこ、ついて…」

「…座つてたらつ、しづらい」

四つん這いになつた彼を追いかけて、僕は、アクアブルーでしたように、彼を後ろから突いた。

「ああ、ああ、もつと、つよく…」

彼が喜ぶところを、狂つたようにえぐる僕は、まるで野獸のようだと思う。

それでも、僕を咥え込むカラダは、柔らかく、優しく

僕をしごきながら、僕の衝動を肯定していた。

彼の胸をまさぐり、震える乳首を擦つてみる。

「あ、ああッ！」

ぎゅうぎゅうと尻が締まり、シーツにぼたぼたと彼の精液が飛び散つた。

シーツに崩れ落ちた虚ろな横顔はとても淫らで、僕は、これまで感じたことのない凶暴な劣情を覚えた。

胸から腹を撫で下ろし、ぶるぶると跳ねるペニスを捕まえた。

「ああ、ああ…」

体液を塗り込めながらサオを揉みしだけば、揺れる腰に僕も絞り上げられる。

みつちりと僕を吸引するカラダは、ぐずぐずと濡れた音を立てて、僕を愛していると言つていた。

「ああ、ああ…」

早くも硬さを戻したサオをしごきながら、彼の亀頭を貫くピアスを揺らしてみる。

「ンアあッ！」

手の中でペニスが脈打ち、また、精液が吹きこぼれる。とろりと糸を引く体液を指にすくい、亀頭に塗りたりながらピアスと一緒に擦つた。

「ねえ、君…どれだけいくの？」

「ああ、ああッ、でいぢいつ、もつと、してつ…」

握つたサオをしごき上げながら、ぐりぐりとピアスを滑らせていくうちに、僕も、たまらなく気持ちよくなれる。

「ああ、ああ…」

ぱちぱちと肉を打つように、下品にねじ込むペニスの奥で、ねつとりと肉が蕩けていくのがわかる。カラダの境目がわからなくなるほど、僕らは深く交わって、回した腰で混じり合っていく。

夢中で濡れた翼に口づけて、重ねた胸で感じる彼の昂奮を、僕も、迫いかける。

「も、もお、おかしくなる……」

「あ……あッ」

全身を貫く激しい快感に、息が止まつた。

思考が碎けて、彼と繋がっていることしかわからなくなる。

極みに達して、彼の深くに嬉々として精を吐く己の律動と、それを搾り取る彼の収縮と、僕の手の中で進るほとぼし彼の精と、嗚咽のような彼の吐息と、抱きすくめた体からこぼれる熱に焼かれる恍惚を、ただ、感じていた。

僕の腕の中で朦朧としている人を、眺めていた。

疲れた眉や、色のないまぶたや、時々小刻みに震える

まつ毛や、記憶よりもクリアに見える瞳の虹彩や、僕を見上げる鼻の頭や、上品な唇や、その小さく開いた隙間から覗く歯や、丸い頬や顎や、耳を、一つ一つ切り取つて、アルバムに収めるように、男娼の記憶に上書きしていく。

「…マイケル」

呟いてみると、その名前は、とても大切なもののよう

に思えた。

「…ウン」

僕を見つめる彼は、本当に、嬉しそうに笑つていた。そして、うつとりと目を細めた彼は、「幸せ」と呟いた。

その顔は、『嬉しい』ではなく、『幸せ』なのだと知る。【…僕の、マイケル】

彼が言つたことを真似てみると、「愛してる」よりフィットする気がした。

「ウン」

マイケルはくすぐつたそうに笑い、僕の手を探つて、手を繫いだ。

僕は、嬉しくて嬉しくて、胸がいっぱいになつて、この  
ういう感覚が「幸せ」なのかもしれないと思つた。

体を起こしたマイケルは、枕をクッションにして、ヘッドボードにもたれた。

僕は、彼の下腹を枕にして、脚の間に潜り込んだ。  
つるりとした肌が心地よくて、頬ずりをしているだけ  
で幸せだつた。

「タバコいい?」

いいと答える前に、彼は火をつけた。

ザワザワという血流を聞きながら、しなやかな腿を撫で  
でているだけで、幸せだつた。

「満足できた?」

優しく髪を撫でられたから、大きく頷いた。

「…すごく、気持ちよかつた、満足した」

「けど…かなり駆け足だつたと思う」

「僕がそうしたから、あれでいいんだ」

彼がひつそりと笑い、腹がふわふわと揺れた。

「まだ、しなきやいけないことが、たくさんあつた—

|

「しなきやいけないことなんてない」「でも—」

「きみが満足したなら、いいんだ」

彼が、静かに煙を吐くのが聞こえた。

「…本当は…」

「…ウン」

繰り返し、髪をゆつたり梳く指が、優しく僕を待つて  
いた。

「…本当は、僕は、君とセックスしなくとも、君がこうして、ここにいてくれるだけで、十分幸せなんだ」

「ウン」

「だから、たぶん…君にとつて僕は、物足りない—」「セックスなんてなくたつていい」

「…」

「今日は、僕がしたかつたからさせた」

「そんな風に思つてない…」

「だからごめん」

「したくなかったわけじゃない…」

「セックスは、したきやすればいいし、したくないな  
らしないでいい、それでいいんだ」

僕の頭を撫でる手のひらに、温かな力がこもつた。

「…わかった」

「ウン」

「…でも、セックスも、幸せだと思つた」

「そう」

「…別に、嫌いなわけじゃない、けど、いつ、どんな

タイミングですればいいのかとか、そういうのも、本

当は、よくわからない…」

「…」

「だから…火曜日と、木曜日と、土曜日にするとか、  
そういうルールがあつたほうが、僕には…フィットす

ると思う」

「きみの好きなようにしよう…それでも、したくなけ

ると思う」

「…」

「きみといる時に、一日一回はちゃんと言うから  
「僕も、きみといるだけで、幸せなんだよ」

「…」

れば無理にしなくていい

「ありがとう」

「ン」

「…本当は、君が笑つてくれるだけで…それでいい」

「きみの“本当”が好きだよ」

彼がクスクス笑い、タバコを消す気配がした。

「ねえ、ディヴィッド」

僕の名前を呼ぶ声は、子守唄みたいに穏やかで、温か  
くて、幸せで、僕は、眠くなつてしまふ。

「…きみは、僕がどれだけきみを愛しているか、最後  
までわからないかも知れないね」

「……」

「それでも、いいんだ」

「…よく、ない」

「…よく、ない」

「きみといる時に、一日一回はちゃんと言うから

「…」

「僕も、きみといるだけで、幸せなんだよ」

「…」

「これが、僕の本當だ」

「…うん」

マイケルは、するりと布団に潜り込むと、僕の頭を抱いた。

彼の肩を枕にした僕は、「おやすみ」を言う前に、すとんと眠りに落ちた。

\* \* \*

目を覚ますと、朝前だった。

リビングに行くと、マイケルがソファで<sup>くつろ</sup>いでいた。

ワードローブを漁つたのか、勝手に僕のナイトガウン

を着ているのが、嬉しい。

そして、テレビには国営放送のニュースがつき、彼は新聞に目を通している。

知っている光景に、僕は、ますます嬉しくなった。

「おはよ」

僕に気づいた彼は、ぱつと腰を上げ、僕の首を抱いて

簡単なキスをくれた。

そして、「朝メシにしよう」と、キツチンに立つた。

「きみは…自炊なんてしないか」

「君はするの？」

「滅多にしない」

そう言つてニヤリとした彼は、ありもでの簡単な朝食を用意してくれ、僕らはキツチンのカウンターに肩を並べて、シリアルと目玉焼きを食べた。

僕がお茶を淹れ、彼にミルクティーを作り、自分にはコーヒーを作つた。彼が、ミルクの量に合格をくれたから、よかつたと思う。

朝食を済ませた後、一緒に風呂に入った。

頭と顔を洗つた後で、僕らは、体を洗う順を披露しあつた。彼は、肩から下半身へ。僕は、足から上半身へと洗うから、真逆だつた。

体を洗つた後、湯に浸かつて、抱き合いながら話をした。彼は、こだわりのシャンプーとボディソープの銘柄を教えてくれた後で、臭いやすい所は石鹼で洗う方

がいいと力説した。幸せだつた。

14時頃、マイケルが昨夜オーダーしたゲーム機が届いた。

早速セッティングをしようとする、彼が「出かけよう」と言うから、開封をやめた。

「どこに？」

「適当に、食料の買い出し、なんもない」

「わかつた」

「あと、僕ん家にも行つてほしい」

「君ん家？」

「そう、P Cとかギターとか、服とか、ちょっと持つてくる」

「なんで？」

「少しづつ、引っ越し」

「そうか」

突然、マイケルが腕を上げ、自分の脇を嗅ぎながら「臭わない？」と僕に聞いた。昨日のままの服が、気に入るらしい。

嗅いでみると、臭くはなかつた。

「臭くない、けど、君の匂いが濃くなつてる」

「…あんまいい氣分じやないね」

「僕は好きだ」

苦笑した彼はドレッシングルームを探り、僕の香水を一通り確認した。そして、一番好みらしいモルトンブランのグラックペッパーをつけると、「これでよし」とジヤケットを羽織つた。

スペイシーで爽やかなウッディの香りは、男娼ではない今の彼によく似合うと思つた。

そして僕は、彼について、ガレージに向かつた。

助手席のマイケルは、昨夜のように窓枠に肘を置き、頬杖をついて、鼻歌を歌つていた。さらに今日は、右足で軽くリズムを取りながら、腿の上に置いた指で鍵盤を弾く真似をしている。  
リラックスした横顔を盗み見ているだけで、僕も幸せになる。

「歌つても、いいよ」

「ギヤラ取るよ」

「わかった」

「嘘だよ、鼻歌がいいんだ」

「そう」

そして彼は、おもむろに取り出したスマホを覗きながら、口を開いた。

「夜、何食べる？」

「…まだ考えてない」

「じゃあディナー行こう」

「わかった」

「どつかいの店ある？」

「すぐには思いつかない」

「そう、じゃ、ここどう？」

彼が突き出したスマホの画面には、見覚えのあるレス

トランのホームページが表示されていた。

「ど、?」

「ガーキンの最上階」

「いいけど、どうして？」

「行つたことない」

「うなの？」

「職場」の近くは、あえて使わなかつた

「うか」

「行つてみたかつた」

「じゃあ行こう」

「予約した」

マイケルはニコリと白い歯を見せて笑い、スマホをし

まうと、また、鼻歌を歌い始めた。

まるで、当たり前みたいに彼がそこにいることが、幸

せだと思う。

そして僕は、ハンドルを切つてカムデン方面へと車を

向けた。

(おわり)

## かいせつ

感情・機能が欠落した恋や愛を知らない男と、性愛のプロフェッショナルが恋に落ちるお話です。ロボットみたいなdさんと「Laws of Attraction」風のmさんで想像して楽しんでいただければというものの。

あ、お話中の金額の単位は想像しやすいよう、円のつもりなのでよろしくお願ひします。

最終的に「セックスなんてなくたっていい」ふたりに着地する、過去一年で書いてきた作品の中で最もプラトニックなふたりなのですが、とても好きです。書いてるうちにdさんが可愛くて仕方なくなつて、ついつい長くなつてしまつたくらい。そしてできたお話はとても幸せで、書いた後はとんでもない満足感があり、やりきつた!、もう書かなくていいかとのんびりしていました。：が、しばらくして「またなんか書きたいな」と思つて、今日この頃です。。

(2022年5月26日 pixiv に公開)

## あとがき

こちらの本をお手に取つていただき、ありがとうございます」とさいます。当初このタイミングで物質にするつもりがなかつたこの本ですが、まとめてみたらかなりのボリュームになつてしまい、やっぱりまとめておいてよかつたです。また、この本の「アクアブルー」まで、□のお話のガイドpdfでかなり詳細な説明等をしているので、ここで解説はかなりさつくりしたものになつています。ガイドpdfを入手してないので読みたいという方は、ご連絡いただければ送付いたしますのでお気軽にお問い合わせください。

前頁でも少し書いたように、「アクアブルー」を書いた後、もう書かなくていいか」という気持ちだったのですが、結局なんだかんだ書きたくなっています。やっぱりお話を書くのは楽しいので、これからも気が向いたらばちばち書きたいなと考えている昨今です。

□に関して、意識的にはつきりと「アクアブルー」

が大きな区切りになつたので、次に新しいものを書く時は、クロアジの「千夜一夜物語（AUJ）」がそうだつたように、過去作をあまり意識せず、心機一転という感じで書いていきそだなうと思つています。

あ！「千夜一夜物語（AUJ）」は「Hummingbird」のNightbirdからできた作品なので、CPは違えど姉妹作という感覚です。jpで読みたいんじやうという方は、千夜一夜をjpで想像して楽しんでもらつても構いません、お好きなように。で、発端のNightbirdのふたりのお話、ある程度想像はしていますが（もちろんストーリーも細部も別物です）、形にするかは現時点で未定です。やっぱり死別を書くのはしんどいのでもしかしたら気が向いて書くかもしれません。最後に、届くかわかりませんが、感想やマシュマロ等くださる方、ありがとうございます！ 楽しんでいただけているだけで、私はとても幸せです！

2022年10月 めち

2022 年に pixiv に公開した作品を  
名前をモデルに変えて再録しました。  
全て完全な幻覚であり、実在の人物や団体とは一切関係がありません。

The unofficial fanfiction novel of dtms  
Just Another Life

めち

---

発行日	2026 年 1 月（受注頒布版）
著者	めち @akaimechi / pixiv id : 1515
発行	アカイカゲロウ
連絡先	mechiko99@gmail.com / <a href="https://mechi.life">https://mechi.life</a>
印刷所	製本直送 .com 様

---

※オークションサイトやフリマサイトなどの転売を禁じます。  
※使用目的のいかんに関わらず、弊誌からの無断転載・複製を禁じます。  
※処分する際は、お住まいの地域の資源ごみの日などに目立たない形で処分するか、  
専門の業者に依頼してください。  
※落丁・乱丁がありました場合、お手数ですが当方までご連絡ください。